
はるかな旅へ -Dreamland-

KAKU

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

はるかな旅へ - Dreamland -

【Nコード】

N7772S

【作者名】

KAKU

【あらすじ】

intelとマガジンハウスの「あなたを小説家にするプロジェクト」での長編小説の「はるかな旅へ - Dreamland -」をこちらで一部改定して執筆の再開をします。

俺の名はヒロシ。もう随分と長いこと一人で旅してきた。けれどこの半年で俺の旅も変わってきた。今では4人で旅をしている。

今回訪れた町はフォッグストーン。昔一度訪れたことのある懐かし

い町だ。そこには知り合いになったマスターが経営しているバーがあり、その日の夕方、仲間のハセと一緒に入ってみることにした。するとそこにシルビア（金髪の美女）が現れ、今晚夕食を彼女とマスターの住んでいるトレーラーハウスで食べることとなった。その食事の途中にハセが外に出たきり帰ってこない。周辺を探しても見つからない。そのことでシルビアたちに問うと、二人はあるビジネスに参与していた。そのことを聞いているうちに俺が知らないうちに、シルビアは俺の飲んでいる紅茶にそのビジネスで売っているという不思議な「サプリメント」を混入していた。俺はその場で睡眠に襲われ、気がつくときまったく別の場所に来ていた。そこはシルビアが言うには、現実の世界ではなく「夢の世界」だという。そしてシルビアは俺に会わせたい人がいるので一緒についてきて欲しいという。そこで俺たちはこの「夢の世界」を旅することになった。しかしその「夢の世界」は実は恐ろしいビーストがいることがわかった。一方ハセも、ケイトという女性とこの「夢の世界」に入っていた。しかし俺たちはお互いまだそのことを知らなかった。そして俺の旅仲間のリヨウは現実の世界で、もう一人の仲間のクルミに連れられてある任務のためにカーメルへと俺たちよりも一足早く向かっていった。その任務も随分とリスクがあるようだ。みんなこの先、大丈夫なのか…。

プロローグ S・01 アイリッシュ・バー

はるかな旅へ

l a n d -

- D r e a m

人は生きていくかぎり、誰かと出会い、また別れるときがやってくる。そして一度別れると多くの場合、再び出会うことはまずできないものだ。彼が旅人であっても、そうでなくても……。だから人は誰でも時を旅する旅人である。「ヒロシの日記」より

<登場人物の紹介>

ヒロシ：「はるかな旅へ」のレギュラー・メンバーでありこの物語の中心的な存在。イギリスの出身らしい。実は彼の旅の真の目的は誰にもわからない。

ハセ：ヒロシの旅の仲間であり、ヒロシの数少ない心を許せる親友的な存在。国際A級ライセンスを持つ一応レーサーでもあり、車の整備士としての腕も優れている。料理の腕もいい、またかなりのゲルメでもある。ニュージージーランドの小さな村の出身。

クルミ：謎多き女。ヒロシたちがウエスト・コーストを旅しているときに何度か会ううちに知り合うようになった。そしてときおり一緒に旅をするときもある。彼女の旅の目的はわからないが、かなりリスクーなことを行っているようだ。

リョウ：ヒロシたち4人の中では一番最後に加わった少年。クルミ

にはまるで弟のように慕われている。ウエスト・コーストのポートランドのダウン・タウンで孤児たちのリーダーをしていた。ある理由で今はヒロシたちと旅をするようになった。また、ときおりクルミの手伝いをすることもある。

シルビア…今回の話の中では中心人物。マスターKと共にフォッグストーンにある「アイリーンズ・バー」で働いている。またそこではシンガーも兼ねている。

マスターK…アイリーンズ・バーの経営者。またヒロシのよき理解者。

アイリーン…アイリーンズ・バーの名の由来になった、ピアノを弾き歌うシンガーだった。そしてシルビアの亡くなった母親。

コロ…ヒロシの子どもの頃よく遊んだ白い犬。今はもう亡くなっているが、Dreamlandで再開する。

ナルア…ハセの子どもの頃、一緒に遊んでいたマオリの族長の長女。やはり今はもう亡くなっているが、Dreamlandで再開する。

ケイト…ケインのビジネスを手伝っている女。一見冷淡なようだが、内面はそうでもないらしい。

ケイン…Dreamlandに入るための「サプリメント」(?)「」をビジネスにしている、正体不明の人物。

ゴードン…シルビアにつきまとう、シルビアに言わせると嫌な奴。しかし、ただそれだけではなさそうな謎の男。

ベルナー…Dreamlandの世界に住みながらこの世界の研究

を続けている。シルビアにとっては心強い味方。

カール：Dreamlandではベルナーの馬番として暮らしている。この世界にいる「幻獣」を間近で見た唯一の人物。

プロローグ

サンタ・クルーズを過ぎると、ルート1は広大な入り江に沿って右にカーブしていく。1920年から30年代はこの湾でのイワシ漁は盛んで、フォッグストーンには今でもその名残のイワシの缶詰工場の跡が残っている。今では、そこはちょっとした観光名所の建物となっている。ハセとリヨウのたつての願いで、俺たちはフォッグストーンに向かう前に、このサンタクルーズの森の奥にある不思議なスポット、その名もくミステリー・スポットと呼ばれるところに立ち寄ることにした。またクルミはというと、一人でバイクで人と会うとか言っつて、今朝のモーテルをすでに俺たちよりも先に出してしまった。そしてこのサンタ・クルーズにきているはずだ。後を追うなどというメモをリヨウ経由で渡された。一体クルミは誰と会っつていうのだろう。

道はミステリー・スポットに向かうほど、どんどん細くなってきた。大型バスなどでは行くことができないところだった。またその分、森の木々の葉が道に枝垂れかかったりなんとなくその名に相応しい雰囲気になってきた。

「なんか不気味な雰囲気になってきたね」とリヨウがいうと、
「ワクワクしてくるぜ」とハセ。

ハセは怖いもの知らずというか、むこうみずなところがちょっとある。そういえばハセのいたニュージーランドには過激なスポーツが多かった。その点リヨウはポートランドの下町育ちだから危険察知が極めて早かった。しかし、今回はハセに同意だ。このミステリー・スポットは危険なところではなく、重力・磁気異常地点という

ことで、いろいろと変わったことが起こる。ちなみにオカルト的でもない。前に行った時には目の前の身長の違い二人が場所を入れ替わると高さが同じに見えたり、ボールが下から上に転がっていったり、鉄の振り子を右から押した場合と左から押した場合では重さが違つて感じたりと…その理由を自分なりに考えてみたが結局はわからなかった。で、今回も八セたちと行つてみたが、謎は深まるばかりだった。とにかく常識では通用しないそんな場所がこのサンタ・クルーズの森の奥にひそやかにだが存在している。

そのミステリー・スポットの見学の後、偶然にも、途中の道でクルミと合流した。それから俺たち4人は遅めのランチをとつたのだが、その後に、急にクルミはリヨウを連れて先にカームルに行くことになった。なんでもサンタ・クルーズであつた友人がカームルの高級ホテル<ラ・プラード>のスイートルームを予約してくれたらしい。

「じゃあ、夕食はどうするんだ？」俺がクルミに尋ねると、

「実は、夕食つきなの」ということだった。

「ラ・プラードでディナーだつて!？」

「そんなにすごいのか？」とリヨウがきいてきた。

「ラ・プラードはカームルでは最高級のホテルなんだよ。料理だつてフランス料理のフルコースだぞ」

「え、そんなにすごいホテルだったのか？ヒロシは泊まったことあるの？」とクルミが今度はきいてきた。

「まさか。1泊最低でも300ドルは下らないんだぞ。でもクルミの友人つて実はすごいお金もちなんだな。それにしても、変わつてるな。自分は森の奥でひっそりと暮らして、友達にはあんなすごいホテルのスイートルームに泊まらせるんだからな…」

「金持ちの考えることなんて所詮我々プロレタリアにや、わからないつてことさ」と八セがもつともだというそぶりで言う。

「だから変人つていったでしょ」とクルミ。それで、13才の特権つてやつでリヨウがクルミと一緒に泊まることになつたのだが、

「ところで、リヨウはジャケットはあるにしても、ネクタイとワイシャツは持つてるのか？」

「まさかー、おいらが持つてるわけないじゃん」

「だろうな。クルミ、どうするんだ？」

「そうね、カーメルの町で適当にみつくるっておくわ」

「なら、カーメルのオーシャン・アベニュー沿いのザ・プラザに行くといい。あそこなら、服ならたいいのものが揃うから」

「サンクス、ヒロシ。じゃあ、お店が閉まらないうちに、リヨウを乗っけて先に行くわね」

「ああ、じゃあ、二人とは明日の朝、10時にフォッグストンのキヤナリー・ロウの前で」

「キヤナリー・ロウね。で、何そこは？」

「いわし工場跡さ。現在はお土産屋等が入っている観光地だから、時間もつぶせるだろうし」

「わかったわ。明日の朝にまたね。リヨウちゃん、必要なものだけもってきてね」

「うん」

「それは置いていけ」とハセ。

「えーっ！？おいらのおやつぶくる…」

「一泊ぐらい我慢しろ。それにうまい夕食くえなくなるぞ」と俺が言うと、

「わかったよ。チエツ…」とリヨウは悔しそうに舌打ちした。

それからまもなく、クルミはリヨウを連れて先に出発した。

夕食をハセの要望で棧橋のレストランに入った。ゆでたダンジネス・クラブとクラム・チャウダーを頼んで食べた。ハセの情報は当たっていて、まずまずのうまい料理だった。

俺は実は以前一人でこの町に来たことがあった。そのときに、親しくなった懐かしいカフェ・バーにこれからハセを連れて行こうと考えていた。

木枯らしも吹く11月頃だったな。寝るのにはまだもつたいない
と思い、その日お泊りのMunrus Ave. 沿いの安いモーテ
ル近くのBARで「ブルー・ムーン」という名のオレンジの香りの
する半濁色のエールを飲んでいたときだった。そこに2人のロッカ
ーらしき若者が入ってきて俺の一つ隣の席に腰をかけたんだ。年は
20代前半ぐらいだった。

「バドを2つ」

というと、その二人はすぐに話し始めたんだ。

「なんで、リクエストを無視したんだ。あのお客さん、チップのは
ぶりたいそうよかったっていうのに。一体どうしたっていうんだ」

「俺はロッカーだからよ。『金髪のジェニー』なんて歌えるかよ！
ってんだ」

「そんなくたらない理由でか」

「くだらないとはなんだよ。俺にもロッカーっていうプライドぐら
いあるんだよ」

「つたく、お前のプライドにもあきれるぜ」

「おい、いいか、教会の聖楽隊にポップスを歌えって言ってやって
くれるのか」

「ああ、ウーパイならやってくれるさ、きつと」

「俺はウーパイとは違う」

「そうだよな、彼女は大スターだ。お前はただのロッカーなものな
」
「言ったな、そういうお前だったたのバンマスだろう」

「ああ、そうさ、だから、俺にはチップが必要なんだよ。頼むから
その鼻持ちならないプライドなんとかしてくれよ…」と言った。

「……とまあ、だいたいこんなやりとりだったよ」

午後に着いたフォッグストーン町の中心地から、やや離れた小さな

バーのカウンター席で俺の左隣に座っているヒロシがいつものようにその町での思い出を俺に聞かせてくれた。俺もヒロシのそうつた話を聞くのが楽しみだった。

「で、そのあと二人はどうなったんだ」と俺は興味津々で聞いた。

「ああ…」とだけ言うと、ヒロシは、自分の手元の先ほど注文したウイスキーのロックの残りを飲み干した。

「実はね、そのバーってのがここなんだよ」って教えてくれた。

「へっつ、それならだいたい昔のことなんだろう？」って俺は尋ねた。「いいや、ハセに会う3年ぐらい前のことだから、今からもう4年も前のことになる」

「いいえ、正確には3年と9ヶ月よ。」と、突然ヒロシの左隣に腰掛けてきた赤いロングドレスの女が話しに割り込んできた。そしてヒロシが振り向きざまに言った、

「シルビアじゃないか!？」

「お久しぶりね、ヒロシ。お元気？」とその美女が答えた。

「ああ、でも今日は休みだってマスターKが言ってたもんだから…」
「ええ、そのことならマスターがさっき私に電話をくれたのよ。あなたが来てるってね。あなたのお隣のイケメンさん、紹介してもらえるかしら」

「ヒロシ、誰だい、その美女は？」俺はヒロシの耳元で小声で話した。

「そうせかさないでくれよ、二人とも。シルビア、彼はハセ。ハセ、彼女は」

「シルビアだろ、それはわかったよ。よろしく、シルビア」

「こちらこそよろしく、ハセくん」

「で、俺が聞きたいのは…」

「私たちの『関係』でしょ？」

そうつたシルビアは小悪魔っぽく微笑み、ヒロシの反応を見るかのように視線を彼に向けてきた。

「マスター、私にいつものお願いね」

「O・K・」

「ブルー・ムーンかい？」とヒロシは彼女に言った。それはまるで話題を変えたがっているかのようにも思えた。

「いいえ、それはもう…。マスター、早くして」という彼女は先ほどとは違って少し元気がなく、やや寂しげな口調だった。

「ちよっと待ってくれ。あちらの常連さんのテーブルの注文が先だよ」

「あちらって」

「ようシルビアじゃあないか、あいかわらずいい女ときてる。たまんねえぜ。今晚暇なら付き合えよ。いいだろう」

声のする方へ振り返ると、わりとゆったりとしたイタリア製らしい黒のジャケットにチャコールグレーのシャツに、ブルース・ブラザーズがかぶっているような黒の帽子を深くかぶった男がいた。こちからだに向かって右目しか見えないが、歳は40代ぐらいだろうか。

「最悪、ゴードンが来てるなんて…」今度ははき捨てるように彼女は言った。

「シルビア、誰なんだい？」

「ヒロシ、あなたは知らなくていいの。イヤな奴…それだけよ」

「おっ、シルビアがいるぜ」

「ほんとだ、シルビアだ」

「なあ、シルビア、せっかくだから何か歌ってくれよ」と急に店の奥にたむろっていた、常連客らしい者たちがせわしなくなってきた。「もう、しょうがないわねえ。ヒロシ、ちよっとここで待っていてね。向こうで2、3曲歌ってきちゃうから」

「了解」ヒロシは先ほど注文したジェイムソンのロックを一口飲むとそう答えた。

「そつだ、あなたに久しぶりだから歌ってあげるわね、あの曲を」

「あの曲？」ヒロシはすぐにはその曲のことが浮かばなかったよう

だった。

「シルビアが歌ってくれるぞ！」

「待ってました！」また先ほどの常連客らから声があがった。

するとシルビアがピアノのある小さなステージにいこうとしたときだった。先ほどのゴードンとかいう奴の前を通ろうとしたときに、奴はおもむろに彼女の手を掴んだ。とほとんど同時に一瞬だが二人の目が合った。その後、すぐにシルビアの方から手をふりほどこうとした。そのとき、彼が立ち上がり彼女の耳元に何かを囁いた。すると彼女は顔にしわをよせたかのように見えた。

「ええ、わかつてるわ…」とシルビアが答えた。すると男は席に座りなおした。

「さて、ご来場の皆さん、静粛に。こんばんは、いつもいつもこんな今にも倒れそうな古いBARに飲みに来てくれてありがとう。でもね、この今にもつぶれそうなこの店を新しく作り直すのにはまだまだ皆さん飲んでくれないとダメみたいだわ。それに私のこのドレスだってもうみんな見飽きちゃったでしょ。私の新しいドレスが見たいんだったらもつとじゃんじゃん注文してヘッドが出るくらい飲んでちょうだい。みんな、わかった！」

「ハハハ、今日は一段とシルビア節がさえまくってるじゃないか」

「ドレスだったらこの俺が買ってやるよ！」また常連たちから声が上がった。すると、シルビアが切り返した。

「そうよ、フェス。久しぶりの友達が見えてるんだから。ステイプ、あなたの見立ては趣味悪いから遠慮しておくわ。さあ、それではまずこの1曲からね。CALLING YOUよ」

「まったく、シルビアの毒舌にはかなわんよ。ここだってオールタウンの昔からある少しは名の知れたBARだつていうのに…」とマスターが愚痴りながら俺たちに話しかけてきた。

「俺はこの雰囲気好きだよ。それにしても、シルビアの毒舌はあいかわらずだなあ…」とヒロシが懐かしむようにそれに答えた。

「ああ、特に今夜は誰かさんのせいで、調子いいみたいだな。お帰り、ヒロシ。今度はどのくらいこの町にいられるんだい」

「まだ、今のところ決めてない」

「そうか、だったらしばらくはいてもらえるところいいね。もし、まだ宿が決まっていなかったら俺の家に部屋が1つ空いてるからなんだ。だったらここにいてる間使ってもいいんだよ。どうだい」

「ああ、あそこか…。とりあえず今晚の宿はみつかったんだ」

「あ、あの、ぜひそうさせてください、マスター。ヒロシ、ここはご厚意をうけよう。少しでもお金は節約しないと…」

ヒロシと一緒に旅をはじめてからもう半年はたつ。俺たちはわけあって、といつてももっぱらヒロシが決めるんだけど、一つのその町に長く居続けるときがあった。そしていざ宿泊はというと、ダウンタウンの比較的リーズナブルなモーテルを使うこともしばしばあるが、こんな風にその町で出会った人の家に泊まらせてもらうこともある。こんなチャンス、みすみす逃す手はない。それに今回はヒロシの昔なじみの人の家なわけだし…。

「ハセ、BARで飲みながらいうセリフじゃあないと思うんだけど…。それにさっき仮予約済ませてきたろう」

「そんなの、いつものことだろ。ここは費用節約さ。マスターぜひお願いします！」

「やあ、ハセ。ようこそわがBARへ。うれしいねえ。このヒロシよりも話がわかるじゃあないか」

「いえ、『長旅は節約』が肝心ですから」

「ふん、で、昨日も町の情報誌に載ってる店で名物料理食べようって率先して食べに入ったのは誰だったかな？」

「アハハハ、そ、そりゃあさあ、旅行にはグルメも大事な要素だしね」

「ハセ、もう一度言ってくれないか、今の『セリフ』」

「えっ、旅行には…」

「ハセ、前にも言ったが俺たちは『旅』をしている。観光旅行とは

違うぞ」

「ああ、わかってるよ……。でも旅行も旅もどうせなら楽しいほうがいいに決まってるよ。ねえ、マスター」

「ヒロシ、おまえさん、ハセにはまだ……」

「マスターK、そこまでだ。これ、おかわり頼むよ」

「あ、ああ……O・K・すぐ作るとしよう」するとマスターはその場から逃げるかのように俺たちの前から離れていった。

「ところで、マスターK、いつから彼女のドリンクの好みは変わったんだい？」

「お前がこの町を去ってからすぐだよ。シルビアはな……」

「ああ、わかってるよ……。でも俺の答えは決まっていた。そしてこれからも……」

「ヒロシ、お前はいつまでこの『旅』を続けるんだ。そもそもお前の旅の終点ってのはどこなんだ」

「マスター、ヒロシは絶対にそのことについては誰にも話さないんだ。俺も何度もそのことは聞いたよ。でももう今ではどうだっていい。俺はヒロシと共に一緒に旅を続ける。それが楽しいしうれしいんだ。……明日何が待ってるかわからない。時には不安なときやちよつとヤバかったときもあつたけれど、でもそれでも俺はヒロシと一緒にこの旅を続けていきたいんだ」

「ハセ君、ヒロシはいわば俺やシルビアにとって他人じゃあない。家族みたいなもんだ。だから、そのヒロシと共に旅を続けるキミもこれからはヒロシ同様、家族のように迎えよう。これからもヒロシをよろしく頼むよ」

「ええ、こちらこそ、マスター」

「よかつたら、Kと呼んでくれ」

「ええ」

「マスターはマスターKさ」とヒロシが言った。

「そうか、……じゃあ俺も『マスターK』」

「なんかその呼び方は照れるな」と言つてマスターは照れ隠しに笑

った。

それからしばらく3人でいろいろと話をしているとシルビアが再び戻ってきた。

「ずいぶん話が盛り上がったたじやない。二人とも私の歌なんて全然どこ吹く風ってかんじね」

「いや、シルビア。キミの歌、そのとつても、よかったよ」と俺はとつさに取り繕った。つもりだったんだけれど。

「ふうん。ハセくん、キミおもしろいわね」とあっさりと言われてしまった。

「そ、そうかな、ハハ…」俺は笑うしかなかった。そんな俺をみておもしろそうにヒロシは笑った。ちつくしょう。

「で、マスター、ヒロシは泊まるんでしょ。わたしたちの家に」

「わたしたち？」と俺は思わず声に出してしまった。え、この二人一緒に暮らしてたのかよ。ってことはつまり…。

「アレ!? まだ、言っただけだったの? 二人とも」

「ハイ」と、マスターとヒロシはハモって答えた。

ヒロシと俺はこのあと間もなく、このBARのすぐ横のトレーラー・ハウスに向かった。

「本当はどこかいいレストランでって言いたいところだけれど、こんばんはおうちでディナーよ。ところで、ヒロシ、ハセ、二人は何を飲むの? ワイン? それともビール? まだあるわよ。コーラでしょ、オレンジジュースにティーバッグの紅茶にインスタントのコーヒー。何がいい?」

「コーラで。」と俺は言った。

「ヒロシ、あなたは何にするの?」

「水でいいよ」

「了解。食後に紅茶だったわよね。今晚はとっておきのあるわよ。

二人は先に飲んでいてね、私、着替えてくるから」するとクルミは

玄関横にある彼女の部屋に入ってしまった。外からはわからなかったが、なかなか中は快適な造りだった。

10分ほどしてから、シルビアは先ほどのBARのときとは変わって履着古したブリーチのジーンズに足元はスニーカー、胸元の開いたピンクのTシャツの上に紺のパーカーを着ていた。この国に入ってからよく見かけるカジュアルな装いだった。髪もさつきまではアップでまとめていたのを今はおろしている。肩下 20センチくらいのダークブラウンのソバージュだった。これはこれでまた彼女の魅力を引き出していた。

「さて、わたしはワインでも飲もうかしら」

「どっちを飲みたい？」とヒロシがシルビアにたずねた。

「白がいいな。たしか冷蔵庫にナパ・バレー産のシャルドネが残ってたはずだけど」するとヒロシが立ち上がって冷蔵庫へ向かっていった。

「O.K.これだな。シルビアはそこで座ってな。グラスは洗面台の上の棚だったよな」

「ええ、ありがと、ヒロシ、優しいんだ」彼女はヒロシを見て、はにかみながら答えた。

ヒロシもシルビアを一瞬見つめた。そのすぐ後、ヒロシはシルビアのグラスにそのワインを注ぎながら言った。

「ワインってのは女が一人、手尺で飲むもんじゃないだろ」

へっつ、そうなんだ…覚えとこ。

「ところで、マスターKは？」とヒロシがライトイエローに塗られた壁にかかっている、やや古びた木製の壁時計を見ながら言った。

「もうすぐ来るわ。先に始めてって。実はきのうの残りなんだけれど、わたしの特製ミートローフが冷蔵庫にあるんだけどよかつたら、みんなで温めて食べない？あまりもので悪いんだけど、味はけっこういけるわよ」

「O・K・俺がそれを温めるよ」と今度はすばやく俺が立ち上がった。

「オーブンで1分半で充分よ。ありがと、ハセ君。二人の紳士がいて、今晚は幸せだわ」と言ってシルビアは微笑んだ。

「うわあ、これうまそうだ。シルビアは、歌だけじゃあなくて料理もうまいんだ」と俺は思わず舌なめずりしながら言った。

「そうよ。歌だけじゃないわ。結婚したらいい奥さんになるんだから…」すると、シルビアは立ち上がって冷蔵庫を開けた。

「えっ、じゃあまだ結婚してないんだ!？」

「誰と?まさか、マスターとですって?フフっ、やめてよ。悪い冗談は。あ〜んもう私ったら、せっかくシーザーサラダ作ったのにドレッシングがきれてるわ。どうしましょう」

俺はなぜかホツとした。

シルビア、オリーブ・オイルはあるかい?」と俺はたずねた。

「ええ、それならあるわ」

「だったら、ちょっと待ってて」すると俺は、部屋から出て行くこととした。

「ハセ、今頃にどこに行くんだ?」

「ちょっと車にね。とっておきの持ってくるよ」

「ああ、なるほど。了解とヒロシが手を上げて答えた。

「ねえ、彼一体何を持ってくるっていうの?」

「ああ見えても、奴はけっこうなグルメなのさ」

「へえ、人ってみかけによらないのね」

「ああ、人は必ずしもみかけどおりじゃない…」

ヒロシたちのいるトレーラー・ハウスから外に出ると、BARの裏手にある駐車場へ向かった。それにしてもシルビアたちの住んでいるこのトレーラー・ハウスは俺の故郷の町の家々と比べても大きかった。やはり、この国はすべてが大きい。それに人間もでかい奴らがいっぱいいる。それにしてもヒロシはいつたいこれまで何力国

旅をしてきたんだ。たしか彼の故郷はイングランドっていった。それに、フランスやイタリアのこともよく知っているようだった。そしてこの国。しかも家族同然の親しい仲間もいる。今さらながら彼の交友関係と旅の経歴のすごさを感じる。そして、やはり気になるのはヒロシの旅の目的だ。彼は絶対にこの長い旅の目的を決して明かさない。ヒロシはいつか俺に旅の真の目的を教えてくれるのだろうか？それとも…。

「あつた〜。これこれ、モデナ産の極上8年物のバルサミコ・ソース。やっぱ、サラダにはこれだね！」と、俺がガソリンと同じくらい大事なこのバルサミコ・ソースをとったときだった。

「出て行ってくれ！」先ほどいたバーの方から声が聞こえた。

「ああわかった。但し期限は守れよ。遅れたらアイリーンズ・バーはどうなっても知らないからな。俺にだって限界がある。いいな」

「ああ、約束は守る。だから、今日みたいに人前でシルビアに手を出すな」

「なんだって!？」

「ふん、いい加減娘離れしたらどうだ。あれだけのいい女ほっておいたらバチがあたるってもんだろ。それよりも本当にそろえられるんだろうな。タイム・リミットまで時間がないぞ」

「ああ、わかつてる。だからこんばんはもう帰ってくれ。頼む」

「O・K。じゃあまたくるぜ。それまでせいぜい頑張ってくれよ。じゃあな」話しているのは、マスターとさっきのシルビアがいつていたいやな奴だった。これってけっこうヤバい展開じゃないか。ヒロシに知らせないと…。

そのとき、誰かが後ろから話しかけてきた。

「おっと、そのままじつとして。キミは今の話をきいていたようだね」

「いや、俺はその…このソースをとりに今きたばかりで…」と俺は彼に言われたとおり、背を向けたまま言った。たしかにへたに顔を

見ないほうがいいかもしれないとそんな気がしたからだった。

「それかい。モテナ産のバルサミコ・ソースか。なかなかいいもの使っているみたいだね。私もその愛用者だよ。でもそれが割れたりしたら気の毒だな」

「割れるって？」と俺は言った。また、声の主が穏やかな物言いだつたので、俺は彼に向き合うことにした。その男の身長は1m90cmはあった。彼は黒いロングのトレンチ・コートを羽織っていた。目は赤いサングラスをかけていてよくわからなかった。金髪のロンゲに同じ色の髭を口元に生やしていた。

「いやあ、キミがおとなしくついてきてくれればそんなことにはならないと思うがね…。キミしただいよ」

一方、ダイニングでは

「ハセ、何やってんだらうな」

「そうね、あれからもう15分にもなるっていうのに。ひよっとしてグロツサリーにでもドレッシングをわざわざ買いに行ってくれてるのかしら？」

「それなら、奴はエキストラ・ヴァージン・オリーブ・オイルを買ってくるだらうな」

「グルメだから」今度はシルビアとヒロシがハモって言った。

「ヒロシ、待ってる間、ワイン付き合わない？」

「ああ、そうするかな」

2話目へつづく…

S・02 ハセの消息

はるかな旅へ - Dreamland -

S・02 ハセの消息

シルビアとヒロシがワインを飲み始めようとするすぐにマスターKがバーを閉めて帰ってきた。

「おう。やってるね。俺もそれいただこうかな」とマスターKがドアから入るとすぐに二人に声をかけた。テーブルに着くや否やマスターがヒロシたちに訊ねてきた。

「ん？ ハセ君はどうしたんだい？」

「それが、さつき車に行つたつきりもう15分ぐらいたつんだけれど戻ってこないのよ」

「そうか…、ちょっとみてこよう」

「あ、俺も行くよ」

「私も行くわ」

その駐車場はオレンジ色の電灯が一つだけついているだけだった。ヒロシたちは懐中電灯を使いハセの車とその周囲を見回した。

「やっぱり、グロッサリーに行つたんじゃないかしら」

「いや、それならハセは車を使う。でも車はここに置いてある。それに動かした様子もない」

とヒロシがボンネットを触って言った。するとヒロシが足元で何かを見つけた。

「こつちだ、シルビア。ハセはこの方向へ向かったようだ」とまたヒロシが言った。

「どうして？」とシルビアが尋ねた。

「ああ、これだよ。ハセが持ってこようとしたものさ。奴はそれをわざわざ少しづつこぼして跡を残している。それが向うへ続いてい

る」

「なんで、わざわざ、そんなことを…」

「ああ、……おそらくそうするしかなかったのさ。俺たちに知らせるには。そして相手に知られないようにするにも…」

「どういうこと？」とシルビアがヒロシにたずねた。

「バルサミコソースならこれだけ周りが暗ければ、足元を照らさない限り気づかれずにすむ。彼はここで誰かに出会い、その者と同行しなければならなかったんだろう」

「ハセ君、大丈夫かしら…」

「ハセの今の状況は決してよくはないだろうよ。けれど、彼なら大丈夫どころかとっても冷静に行動しているよ。いや、ちよつとご機嫌斜めかもな」

「どうして、そんなことまでわかるの？」

「それは、このソースのこぼれ方だよ。ほぼ等間隔でこぼれてるだろ。つまり、彼はそれだけ冷静に行動がとれたってことだ。ご機嫌斜めっていうのは、このソースは、旅先で知り合った彼にとって大事な人からのプレゼントなんだ。それをサラダでなくこんな道端で使う羽目になるとはな…。機嫌がいいわけがないだろ。とりあえず、向うに行ってみよう」

そのソースの跡は駐車場の外にある道路わきのコイン投入タイプの駐車スペースまで続いていた。

「ここで跡が終わっているわ」

「おそらくここから、ハセは車に乗せられたんだと思う」

「でもなぜ中の駐車場のほうが安いのにわざわざ外の高い方を使ったのかしら」

「んーと、シルビア、ここの駐車料金はいくらだい？」

「たしか、1時間で3ドルのはずよ」

「そうか、これで間違いないだろうな。ここなら15分間で1ドルつまり、30分以内ならこっちの方が安いし、ここなら誰にも見られることもなく車を止められる。中でなら駐車場から出るときにあ

その精算所で人に見られる。おそらくそれも計算のうちのはず。それと、このパーキングメーターはまだ1分と25秒残っている。ハセが部屋を出てからもう20分はすぎた。今が20:23だから車はここに19:55頃にはいただろう。それと、車からここまで歩いて2分はかかる。ハセがここから出発したのは20:00から20:20の間だろう」

「ヒロシ、警察に連絡した方がいいんじゃないの？」

「ああ、そうだな。けれど、シルビア、マスターK、警察を呼んだら二人に迷惑かからないかい？」

「ああ」とマスターKが答えた。

「警察がきたらいろいろと調べられる。お店のことなど、いいのかい？本当に呼んでも？」

「な、何を言いたいんだい、ヒロシ……」

そのときのマスターKは焦悴したような表情だった。

「マスターK、いつから店を閉めるのにこんなに時間かかるようになったんだい？本当は誰かに会ってたから、遅くなった。それもやむを得ない理由で」

「ヒロシ、何を根拠で、そんなことを……」とマスターKが尋ねた。

「あのゴードンって奴と話してたんじゃないの？」

「えっ！？そうなのK？」と今度はシルビアが驚いてマスターに聞いた。

「マスターK、ゴードンに何を言われたんだい。よかったら話してくれないか？俺はいつだってマスターたちの味方だよ」

「……」

「マスター、ハセの行方もからんでるんだ。頼むよ」

「ヒロシ、どういうこと？なぜハセの行方とゴードンと関係があるっていうの？それになんて脅されてるって思っつもの？」

「シルビア、俺はそこまでは言っつてなかったよ……」

「あ……」

「十中八九そうだとは思っていたけれど。じゃあ、種あかしという」

「まず、奴はマスターKに『同じものを。』って頼んでいた。奴のテーブルには既に空のショットグラスが2杯置いてあった。それとマスターが奴に出した酒はグラッパだろ。でも、お金を払ったところは俺には見えなかった。次にシルビアが歌いに行こうとしたときに、奴はキミの手を掴んだらう？でもキミはその手を振りほどこうとはしなかった。あのときは俺の知っている、強気のシルビアとはまるで……別人だった。そして、まもなく奴が席をたったときもやはりテーブルには代金どころかチップさえ置いてなかった。グラッパはイタリアのいい酒だ。いくらマスターが気前良くても3杯も無料で出すのはおかしいだらう？それとも実はけっこう儲かってんだ、ここって！」

「そんなわけ…みればわかるでしょ。ヒロシったら。もう！」
「ワルイ……。さてと、ここから重要な点なんだ。…実はゴードンは誰かにつけられていたんだと思う」

「なんですって!？」
「どうしてそんなことまで…」と今度はマスターKがヒロシに尋ねた。

「それは、ハセを連れていったものはゴードンじゃないからだよ」「ヒロシ、省かないでわかるように説明をして」

「O・K・まずゴードンはタクシーか歩いてここまで来たんだらう。もしも車でやってきてすぐ帰る気があるなら、グラッパを3杯も飲むようなことはしないだらうよ。あれのアルコール度数は40度を超えるからね。それに酔っぱらった奴なんかハセが連れていかれるわけがない」

「なるほど。そうね、ハセ君、力もありそうだし」とシルビアがうなづいた。

「おそらく、ハセがああ駐車場に来たときに、ゴードンを見かけた

んだろう。その時にゴードンは何かをしていた。そのことは、ハセを連れていったものにとつてはハセに見られたくないことだった。でも、…いや、それどころか、ハセはその内容を知っているんだ。そして、ハセが戻ってそのことを伝えられたら、連れていったものにとつてマズイ状況になる。だから、連れていかれた。そして、ゴードンと話していた相手っていうのは、マスターK、あなただよ」

「まいったな…、ヒロシ、そのとおりだよ」

「すべて話してくれませんか？」

「シルビア、いいな」とマスターが言った。

「え、ええ…。わかつたわ」

「ひとまず、家に帰ろう。話はそれからしよう」

「ええ。ヒロシ、ごめんなさい…私たちのことでハセくんまで」

シルビアの目から涙が一筋こぼれおちた。

それから三人は家に戻った。まずはじめにマスターKがリビングルームでヒロシと話した。

「ー奴が最初にアイリーズ・バーに来たのは、2年前の秋だったよ。ちょうど今日のように海からの冷たい風が吹く寒い日だった。『うーなんて寒い日なんだ』と奴はオーバーに身震いをして見せたから、こちらも調子づいてこう言ったよ。」

「ああ、こんな日は彼女とネコのようにあつたかい毛布にくるまっていたいね、暖炉のそばで」ってね。するとヤツは言ったよ。」

「それは最高だ。でもあいにくここには彼女も毛布もない。この寒さから逃れるにはどうしたらいい？」

「俺ならそうだな、熱い紅茶にブランデーを垂らして飲むだろうな」と俺は奴にそういった。すると奴は言ったんだ。」

「紅茶か！そいつはいいな。マスター、それを作ってもらえないかい？」

「ちょっと時間かかるけれどいいかな？うちの店の紅茶はリーフテ

イーなんでね。そのかわり、香りは抜群さ」といって、俺は柵からダージリンティーの缶を取り出した。

俺は最初奴がこの店に入ってきたときに、何か日常とは異なる別の寒々とした世界からやって来た者のように思えたよ。ブランドティーを差し出すと奴はそれを大事そうに両手で持ち、ゆっくりと飲み始めた。まるでそれを飲むことによって、何かの魔法から自分の身を解こうとしているようにも見えた。

「こんなにも体が温かくなるものを…俺は長いこと忘れていたよ」とそう奴が言ったのを覚えている。

それからしばらくしてまた奴はやってきた。そのときは閉店直前だった。今度は奴が、

「この間のブランドティーを一杯もらえないかい？」と言ってきたんだ。それで俺は思い出したんだ。

「これだけ飲んだら帰るよ」と奴は寂しげに笑いながら言ってきた。もう店には俺たち以外に誰もいなかった。それからゴードンと俺はしばらく話し続けたんだ。

「なんの話をその時したのか覚えてますか？」

「ああ、この店のことさ。俺にとってここは大事な店なんだって…そう奴に話したんだ。」

「それだけ？」とヒロシは尋ねた。

「それとこの借金のことをいつつかり奴に話してしまっただよ。今思えばあのときからなんだと思うね。すべてがくるいはじめてきたのは…」

「で、借金はどのくらいになるんですか？」

「\$12,000くらいだよ」

「それを奴から借りたの？」

「いや、そうじゃないんだ。実はその一週間前に、ここにある女性が訪れたんだよ」

「ある女性って…」とヒロシが聞き返した。

「きれいな人だったよ。真っ赤な上下のスーツが見事に似合っていた。髪は黒髪でなんとなくオリエンタルな雰囲気顔立ちだね」

「その女性が来てどうしたんです？」

「ああ、商談を持ちかけてきたんだ」

「あなたの店のはつきりいって、経営状況はかなり厳しいようねでも心配要らないわ。あなたの店が使っている銀行は我がグループの傘下にあつてね、そこで、調べたらここのバーってこちら辺でも一番の古い店なんですってね。昨今のオールドタウンの再開発事業の一環として古い伝統のある町並みを壊すことなく残すためにもわが社も少なからず貢献しているの。但し、そのためには少しばかり、経営面でお互い協力し合わなければならぬのだけれど、いかがかしら？」とね、その女が言ってきたんだよ。だから俺はその話をより詳しく聞くこととした。

「まず、あなたの店の借金は一度に全て、我々が肩代わりするわ。無利子での分割で少しずつ返していただければいいわ」と言うんだ。けれどもそれには一つだけ条件があった。

「けれども、このままの経営方針では、またいずれ、借金をしなければならなくなるかもしれないわね。この町はこの2、3年、年に0.2%ずつ人口が減少し続けているの。また、働き盛りの年代はもっと減っているわ」

彼女は店のカウンターバーに腰をかけて足組みをしながらまた話を続けていった。

「そんな状況で、この店の売り上げを伸ばすにはこのままでいいとあなただっと思って思わないでしょう？」

もちろんそんなことはわかっていたさ。でも俺にはこのバーを守っていく必要があった。だから、彼女のその話に乗ることにしたんだよ。

「彼女の話ってというのはどんな…」とヒロシが尋ねた。

「つまりね、ここで、このサプリメントを売ってくれないかしら」というと彼女はこのピンを俺に手渡したんだ。

「売り上げの20%はあなたのものよ。これはね、誰にでも売るわけではないの。ここにリストがあるわ。皆信用のおける人たちよ。

彼らはいつも月に決まってまとめ買いをしてくれるから、商品は確実に売り切れるわ」

というんだ。

「いわゆる会員販売ってやつか…」とヒロシが言った。

「でもなぜ、自分たちで売ろうとしないんだ」

「彼らを買って、さらにそれぞれが5人ずつ、下の会員に売るらしいんだ」

「ネットワークビジネスか…」

「ああ。そんなもんだらう。とにかくそれによって、確実に売り上げが上がった。それによって、徐々に借金もなくなるうとしている。だから、彼女のその商談はともありがたかつたんだよ」

「そうだったのか…」

「ところが、店が順調になってきた頃から、あのゴードンが前よりも頻繁に来るようになった。そして近頃では、シルビアにも個人的に接触するようになってきたんだよ」

「まさか、彼女はゴードンと…」

「ああ…、シルビアは彼と付き合っているようだよ」

「だって、嫌がっていたじゃないか！」とヒロシはやや声高に言った。

「ああ、たしかに嫌がっている。でも、実際にシルビアは時々彼から電話で呼び出されては会いに行っている。なぜだか分からないが、決して断ってはいない」

「……」それに対してヒロシは何も言わなかった。

「なぜなんだろうな…。ゴードンは、最初は気よさそうな人だっ

「ただがな……」

マスターはそういうと立ち上がり、リビングの奥の小さなキッチン
の壁の戸棚から小さな小瓶をとりだした。

「もしかしたら、全てはこのカプセル錠が原因なのかもしれないな
……」

マスターはイスに倒れるかのように座り、左手でそれをヒロシの前
に差し出した。

「あの頃は、精神的にもかなりまいっていたときだったんだ。わし
にはこれが必要だった。ところで、これが何の薬かわかるかい？」

「こ、これは……」

3 話目につづく

S・03 夢の薬

今、ヒロシはマスターKから受け取った小瓶からその中に入っている小さないろいろな色をしたカプセル錠剤をテーブルに出した。そしてやや青ざめた顔で

「これは、ドラッグですか？」とマスターKに尋ねた。

すると、マスターKは両腕でゼスチャーをしながら、

「いいや」と答えた。

「わたしも最初はそう思って警戒したんだよ。だが違った。そんな次元のドラッグなんかとはぜんぜん違う。しかし、ある意味ではこの薬は通常のドラッグ以上にやめられなくなるかもしれない…」

「話がよく飲み込めない…。ドラッグではない。でもやめられなくなる。やめられなくなるっていうのは結局ドラッグと同じじゃないのか」

そこに、シルビアが勝手にドアを開けて入ってきた。

「ヒロシ、私をよく見て。私の顔、身体、どう？」

「どう？…って言われても、その、…きれいだよ」

「それだけ？」

「それだけって…魅力的だよ、女としても…」

「まあ、ほんと？ ありがと。でも今はそういうことじゃなくて、

この身体がドラッグに犯されていると思う？…ってことよ」

「まさか！？ シルビア、キミ、これを飲んだのか…」

そこでマスターKが話した。

「飲んだというよりも最初は飲まされたんだよ…」

「誰に？」とヒロシが聞いた。

「さっき話したその女性からさ」とマスターKが言った。

「ええ、そうよ。でもその後でも私は飲んでるの。でもね、不思議

と身体には何も影響はないのよ」とシルビアが答えた。

「じゃあ、なんでやめられなくなるんだい。一体この薬はなんなんだ。」ヒロシには全く理解ができなかった。

「ヒロシ、アナタも夜寝ると夢を見るでしょ」とシルビアが突然ヒロシに質問をしてきた。

「夢？ ああ、でも何でこんなときにまた…」

「いいから、答えて」

「ああ、時たま見るよ」

「じゃあ、こう思ったことない？ 時々あともうちよつとでいいとこだったのに目が覚めちゃったって」

「ああ、そうだな。そんなときもあったよ」

「じゃあ、もしその夢の続きが見られたらどう？」

「何をいつてるんだい、シルビア。この薬と何か関係があるのかい？」

「ええ、おおありよ。この薬はね、その夢の続きが見られるのよ」

「まさか…本気でいつてるのかい？」

「ええ、おおまじですよ。しかも、それだけじゃないの。夢の中でね、現実の人たちとも出会えるのよ」

「それなら、俺も時々夢で、今までに出会った人たちが出てくるけれど…」

「それは、アナタだけの夢でしょ。でも出会った人たちが朝起きて、同じ夢を見ていたらどう？」

「そんなこと、ありえるわけが…」

それをシルビアがさえぎった。

「あるのよ、現実にな。これがその薬なの？」

「そんなこととても信じられるわけないだろ」とヒロシが言う。

「ええ、その気持ちはよく分かるわ。私だって最初に彼女からこの話を聞いたときには、全く信じようとは思わなかったもの」

「そこで、彼女は証明しようとしたのさ」とマスターK。

「シルビアのカシミラの枝茶の中に、睡眠薬とその薬をそっと入れ

てたらしく、まもなくシルビアは、床に崩れるように眠ったのさ」「ほんとあの時はまんまと彼女にしてやられたと思ったわ。店が閉店後でほんと良かったわよ。けれど、そこでね、夢の中でね、その彼女が現れてきたのよ。そこで『その土地』のことを少し教えてもらったの」

「その土地って？」とヒロシがシルビアに聞いた。

「『ドリームランド』のことよ」

「なんだい、その『ドリームランド』っていうのは？」とヒロシ。

「だからその夢の世界というか土地のことよ」

「シルビア、この話を本気で俺に信じろって言うのかい？」

「もう！ そのきもくちよくわかるわよ！ 言ってる私だって、自分が頭いかれてるんじゃないかって思えるものね、実際に経験してなかったら…。でもね、本気で本気なの、冗談なんかじゃないの」

「確かに、キミを見てればうそは言っていないって思いたいけれど…そんなこと…ほんとに、信じ…られるわけが…あれ、なんだか、変に…眠くなって…おかしいな…」

「でしょう。そう言われると思ったから、あらかじめヒロシのカシミアの枝茶にも同じように睡眠薬と一緒にそのお薬入れちゃったわでも安心して、向こうの世界でまた会えるから。心配しないで、お休みなさい。ヒ・ロ・シ」

そういうとシルビアは微笑した。そしてヒロシはテーブルの上に顔をうつぶして眠りに落ちていった…。

S・04 ドリームランド

ヒロシはふと目が覚めると、そこは野生化した青麦が生い茂っている広い草原だった。そこに大の字になって寝ていた。起き上がると、雲がぼつかりと地上に近いところを流れていた。

「ここは…」すると、横から聞き覚えのある声があった。

「おめざめね。そう、ここがその世界よ。ようこそ『ドリームランド』へ」とシルビア。

「シルビアかい？でもキミいつの間に着替えたんだ？」

今、ヒロシの横に座っていた彼女は白いフレアーな綿のワンピースを着ていた。

「ここではね、夢もある程度はかなうみたいなの。どう？似合ってる？」

「ああ。そうだな、意外だけれど…」とヒロシ。

「意外かあ…、そう。ありがと。一応礼を言っておくわ。でもアナタは全然変わってないのね」とシルビア。

「ああ、旅にはこの恰好が一番いいんだよ」

ヒロシはというと、キャメル色のチノに赤いTシャツとライトブルーの綿のジャケット、たしかにいつものいでたちだった。

「さてと、じゃあ出発しましょう」とシルビアは背伸びを一度してから言った。

「出発ってどこに行くんだい？」とヒロシ。

「そうね、たしかここからだといつもは向こうの方角よ。紹介した人たちがいるの。さあ早く立って、歩いて行くわよ」

「了解」

するとヒロシは立ち上がると先ほどシルビアがしたように一度背伸びをした。

「ふう〜。そうかここが『ドリームランド』なのか」

「ね、だからいったでしょ。ほんとにあるって」

「ほんとっていうけれど、これは俺の夢の中なんだぜ。っていうから今話しているキミは俺が作り出したシルビアなんだから、アレ？　なんで自分の夢なのに言い訳しなきゃならないんだ！？」

「フフフ。まあいいわ、いずれわかるわよ。とにかく行きましょう。のんびりしてたら日が暮れちゃうわ」というとシルビアは歩き始めた。

「わかったよ。そうせかすなって」

そしてヒロシもその後を追っていった。

「どう？ここってきれいなところでしょ、ヒロシ」

「ああ…」

「ねえ、ヒロシって今までどんなところを旅してきたの？」

「ああ…」

「あなたとこうやって、こんな広いところ一緒に歩いたの、今日がはじめてよね。なんだか楽しいわ」

「……」

「ヒロシったら私の話きいてるの？」

「え！？ああ、きいてるよ」

「どうしたの？浮かない顔して？」

「キミはなぜあんな奴なんかと…」

「あんな奴って？」

「いや、なんでもない。それにしても、ほんとにきれいなところだな」

「そうでしょ。それに、雄大なところよね。でも何か癒される感じがしない？」

「ああ、そうだな。ハセがいた島国とか、この間までいたノース・カントリーにもどこか似ているけれど、やっぱりどこか違う感じがする」

「そう、ハセ君の故郷にも似てるの？ところで、ハセ君今頃大丈夫かしらね」

「そういえば、ハセ今頃どうしてるんだらな…」

S・05 カンパニー

「もう目隠しははずしてかまわんよ」先ほどの男が言った。俺は直ぐにその目隠しをとった。

「ここはどこなんだ」と俺はその男に言った。

「ここは我々のオフィスだよ」とその男は大きな背もたれのあるイスに座って話し出した。

「まあキミもそこに腰掛けてくつろいでくれたまえ」と言った。

「紅茶がいいかな？ コーヒーもあるが？」

「一体お前は何者だ」と俺は敵意むき出しでそいつに言葉を放った。

「私かい。私はケイン。で、キミの名はなんていうんだい？」

「お、俺は…」

「キミは人に名前を尋ねて自分では名前もなのらんそんな失礼なヤツじゃあないだろ、ん？」とそいつが言った。

「俺はカズヒコっていう。もつともハセって呼ばれてるけれど」

「そうか、じゃあ私もそのハセのほうで呼ばせてもらうよ」

すると、ドアをたたく音がした。

「カシミラの枝茶（えんたじや）をお持ちしましたわ」

「入ってくれ」

そして扉が開くと濃紺の身体にフィットしたワンピースを着た長い黒髪の女性が入ってきた。

「そこに置いてくれ」

「この男の子なのね」

「ああ」とケインが答えた。

「さあ、ところで、ハセ君、なんでキミがここにつれて来られたのかわかるかい？」

「そうだ、なんで俺はこいつに連れてこられたんだ？」

「いや…」

「だろうな…。だが、その方がキミのためにも好都合だ。でキミはあの時何を見て、聞いたんだ。全て話してもらえんかな、ここで」とその男は俺に要求してきた。

「もし、断ったら？」

「もし？ そんなことは想定外なことだが、もしキミが何か知っていて、ここでそのことを何も教えてくれないことはキミ自身でキミをととてもまずい立場にすることにしてしまっ」

「まずい立場っていうのは？」と俺はケインに聞いたがそれには彼は答えずに、

「キミがどれだけの内容を聞いたのかを教えてくれるだけでいいんだよ。簡単なことさ、それさえわかればもうキミは帰れる。但しそのときの記憶だけは消させてもらおうよ」

「ということは、もし、断ったらここから帰れないってことなのか？」

「ハセ君、キミはなかなか理解力がある。そういうことだ」

「ずいぶんとその話はきかれたら困る話だったみたいだな。なら、こんな取引はどうだい。こちらは見たこと聞いたことを誰にも話さない。だからアンタも俺を解放しろ」

「ハセ君、それだけじゃあダメなんだよ」

ケインは静かだがすごみのある声で言った。

「どうしてだ！」と俺もやや声を上げて言い返した。

「このことはね、一部の関係者以外は知らなくていいことだからよ」先ほど入ってきた女性が言った。

「さあ、冷めないうちに飲んで。これ、カシミラの枝茶なのよ。なかなか他では飲めないものよ」

「そのとおり、ケイトがわざわざインドで買い付けてくれた一級品だからね。しかもケイトの入れるお茶はとつてもうまいんだ。私が保証するよ」

カシミラの枝茶ぐらい俺にだってその希少価値は十分承知していた。状況が違ければ俺だってうれしかったさ。しかしそのときは味よりも気を静めようとその枝茶をすすった。すると、確かに言われたとおりその枝茶は信じられないくらい高貴ないい香りがしておいしかった。

「どうだい？ うまいだろう。これがカシミラの葉ではなく、枝茶の一級品の香りってやつだよ。もちろんこれだけの香りを出すのも入れるものが、正式な入れ方を熟知してるからこそなんだがね」とケインが言った。

「…俺の記憶を消すって言ったな。そんなこと、できるのか」

「ええ、もちろんよ」

「それで、もし俺の記憶がなくなったら、その後はどうなるんだ」
それに答えたのはケインのほうだった。

「キミは仮定形で話をすることが多いな。もしではなく、そういうことになる。そうしたらキミにはもうここにいてもらう必要はなくなる」

「俺を消すってことか？」と俺はケインをにらんでいった。

「ハセくん、あなた、何か勘違いしているようね。私たちはマフィアとは違うわ。れっきとした企業集団なのよ。なぜ、私たちがあなたを消す必要があつて。…バカね」

「わかった。でもどうやってそんなことができるんだ」

「そうだな、記憶がなくなる前に教えてあげてもいいだろう」
すると、彼は胸のポケットからいくつかの錠剤をだした。

「これを飲みさえすればいい。実に簡単なことだろう」

「もし、断ったら…」

「おやおやまた仮定形で話をするんだな」

「でも、実はもうアナタはその薬飲んじゃってるのよ」とケイトが言った。

「なにっ！　ってことはこの枝茶に」

「そうよ、味も香りもないから気づかなかつたでしょうけれど」
ケイトは微笑して言った。

「ちくしょう。俺をだましたのかっ！」

「それは違うわ。これからアナタは眠るのよ。そして夢を見るわ。そして私とここでまた出会うのよ。そしてある場所に向かい、そこでアナタは『技』を受けるの。その後夢から覚めたらアナタは、もうここにはいないわ。そして私たちのことも何も覚えていないってわけ」

俺には何のことかさっぱりわからなかった。やがて、ケイトが言っていたように睡魔が襲ってきたためにそのソファに横に倒れ眠りに

入っていった。

「では、あとを頼むよ。ケイト」

意識が薄れていく中で、ケインの声が聞こえた。

「はい。会長。あとは手はずどおりに」

「さあ、ハセくん。私とすてきな旅をしましょうね」

眠りにはいる俺にケイトは上から覗き込みながらそうつづばやいたように感じた。

4話目へつづく…

カシミラの枝茶（ ）…原産はインドのカシミール地方…というのは表向きの話。お茶の葉と比べてもカシミラの葉は大きくて硬い。実は遺伝学的にもお茶の木とは種が異なる。また、このお茶は20世紀になってから急に世間に知られるようになってきたために、その起源などは実は本当のところまだ明らかにされていない、謎の木である。また、葉を使ったりリーフティもあるが、香りが弱いためのハーブとブレンドしてお茶にすることが多い。しかし、枝のほうはというと、特に新芽が出る直前の枝を折り、燻り乾燥させ、それを急須に入れて飲むとても高貴ないい香りがする。だから育ててから少なくとも3年はたたないと枝茶を作る目的で枝を折ってはいけないと言われている。そのひとつの理由は、枝をいったん折ると桜の木のようにその先に枝を伸ばさなくなる性質をもつからだ。なので枝茶を作る為には現代の農業技術ではたかさんの木を育てなければならぬ為、たかさんの時間と人件費がかかる。そのため、100gでも100ドルは下らないといわれている。とても高価で謎めいたお茶。一説によるとこの木は太古の時代から存在しているという。またある学者がいうにはこの木は地球外から持ち運ばれたという。さまざまな説があるが現在でもルーツは謎のままである。

S・06 最初の門の村 S・07 ケイト

S・06 最初の門の村

「それにしても、随分とここは広い草原なんだな…」とヒロシがその草原を歩きながらつぶやいた。

「ええ、そうね。私も最初にここに着いたときにはそう感じたわ」とシルビアが答えた。

「ところで周りを見渡すと民家が一軒もないけれど、シルビア、キミが紹介したい人って言うのはどこら辺にいるんだい」

「最初の村よ。最初に見える門のある村。そこにいるの」とシルビアが言うのだが、ヒロシが周りをもみても見渡す限り草原しかなかった。

「変ねえ、いつもは直ぐに着くんだけれどな」とシルビア。

「そうなんだ。俺はしばらくこうして歩いてたっていいぜ。こんないい景色ならまだあと2時間は歩いてたってあきないな」とヒロシが言った。

「あつ！だから着かないのよ。ヒロシ、あなた、その村には行きたくないの？」とシルビアが非難がましくヒロシに言った。

「いや、そんなことはないさ。でも、こういう景色の雄大なところを歩くのも久しぶりだからいいなって思ってたんだよ」

「ヒロシ、さつきもいったけれどここは『ドリームランド』よ。あの程度の望みはかなう場所って言ったでしょう」

「ああ、そうさつき言ってたことなら覚えてるよ」とヒロシ。

「ここには正確な位置とか距離なんてないんだわ。だから、私たちがその村に着きたいって願わなければ、永遠にその村には着かないのよ、きつと」

「なんだって！？そんなあいまいな…」

「だから、さあ、ヒロシも願って、心から。その最初の門のある村

にたどり着くようにつて」

「わ、わかった。最初の門のある村だな」

「ええ、そう。今はそれだけ考えて歩いて」

そうして、しばらく歩いてみると、ぼんやりと遠くに、周りが城壁で囲まれた集落が見えてきた。その城壁のほぼ中央には門があるようだった。

「あれがその村かい？」とヒロシが尋ねた。

「ええ、そう、明るいうちに着けてよかったわ」とシルビアがため息まじりで言った。

二人は別に慌てることもなく一定の速さで歩いていたのだが、その村はどんどん迫ってきたように感じられた。そして、ついにはその村の門の前に着いた。

「まるで、中世のドイツの町みたいだな」とヒロシが言った。

「ふん、そうなんだ」とシルビアはあまり興味がないような感じだった。

それから、シルビアは門をたたいた。

「誰かここを開けて頂戴」と彼女は言った。

すると門は、見た目はとても重くて丈夫に見えるのに、音もなく静かに開いていった。

門を入るとまず、2階建ての木造建築が正面の道の左右に連なっていた。また左右には壁に沿って道が続き、壁側の家は壁に張り付くように建てられていたりするのもいくつかあった。正面の道は石畳で、前方には塔があり、そこにもまた、門があった。おそらく、昔のこの町の城壁だろうとヒロシは思った。その門はすでに開かれていて、その門の上には、

「The first gate's village」

と書かれていた。

「おい、シルビア、あそこにお店があるぞ！」とヒロシが言った。その内側の門を越えると、確かに両側にはお店が並んでいた。

「それがどうかしたの？ 村なんだから、当たり前じゃない？」とシルビア。

「シルビア、ここは現実の世界と違うんだろう？ だとしたら、店があるということは、購買する仕組みがあるってことだぞ」

「ええ、そうね」とシルビア。

「何で品物を買うんだい？ お金でかい？ ここのお金の種類は一体なんだい？ まさかドルやユーロじゃあないだろう」とヒロシが尋ねた。

「ヒロシ、あなたすごいわね。わたし、そんなこと考えたことなかったわ」

「ってことは、ここでは何も買わなかったんだ」とヒロシ。

「ええ、欲しいものはまず、最初に持ってたし、おなかも減らないしね」

「なるほど、夢の世界だもんな。でも、ならあそこにあるレストランは何のためにあるんだい？」

「さあ、誰かお腹が減る人のためでしょう」

「って、一体誰がお腹減るってんだよ。これは俺の夢の中だろう」

「んもう…まだ信じてないのね。じゃあ、入ってみましょうよ、ヒロシ」

「え？ ああ、そうだな。確かにそれはいいアイデアだ。おなかが減ってなかったから、入ろうなんて考えられなかったよ」

「でしょう。わたしもいつもそうだったわ。入って、自分に必要のないものや興味のないものには気づかないものよ。たとえそこに何かがあっても、その人にとってはないのと変わらないのかもしれない」

「けれど確かにそこには存在している。それは、誰かの何かの役に立っているからなんだ」

「そうよね、だから私たちが今ここにいてことは少なくとも誰

かの役に立つてることよね？」

「ああ、人はどんな理由でかわからないけれど、この世に生まれてきた以上、何かの役に立っている。人間だけじゃあない。自然界全てのものは何か役割があつてこの世界に存在しているんだと俺は思う。なぜなら自然界は決して無駄なことをしないからなんだ」

「『自然界は無駄なことをしない』か、いい言葉ね。誰の名句？」
「昔、俺の科学の家庭教師をしてくれていた先生の言葉だよ」とヒロシ。

「へえ〜。そうなんだ。家庭教師に習つてたんだ。ヒロシって…」
シルビアは興味深げにヒロシを見ながら言った。

「でも、この夢の世界でもそれが果たしてそうなのかどうかは俺にはわからない。そもそも夢を見ること自体、人にとって必要なものかさえまだわからないんだから…。キミはどう思う、シルビア？」

「『夢を見ること』が必要かどうかってこと？」

「ああ」
「そうね、難しい質問ね。でもあつてもいいんじゃないかしら」
「え？」

「つまり、恋愛とおなじよ。人は誰かを好きになるけれど、好きにならなくたつて生きていけるでしょ？でも私は誰かを好きでいたい。誰かを愛して生きていきたい。だから、夢だつて見なくても生きていけるけれど、私は時々夢を見たいな。だつて夢には現実ではありえないこと、不可能なことが可能になるでしょう」

「例えばどんなことだい？」
「まず、現実では会えない人と出会えるんじゃないかしら。それに現実では行けない知らない場所にも行けるでしょ。ほら、こうして今がそう。これって楽しいじゃない？」

シルビアは笑つて言った。
「ああ、でも反対に現実ではありえない怖いことやいやなこと起きないか？」

「ヒロシったらいやなこと言うのね。でも昔からそういうのは逆夢

っていつて逆によくなるのよ」

「って、ママからでもきいたんだろ」とヒロシ。

「俺も昔、かあさんからきいたことあるよ」

ヒロシは笑って話した。しかし、シルビアはそれにはやや寂しげに笑っただけだった。

二人がレストランの中に入ろうとすると、その入り口では、一匹の白い犬と店員が話していた。

「どうしてわかってくれないんだろうねえ。だからなんべん言っても今日は大事な会議がここで行われるから他の人は入れないんだ。

もちろん犬も同じだ。だから悪いが今日は帰っておくれ」

「シルビア、ほら、あそこで人が犬と話してる…」

「ま、それもありませんじゃないかしら、ここでは」

「とにかく、彼に聞いてみることにするよ」

ヒロシは白い犬と話している店員のそばまで行った。

「すみません。ここでは何を出しているんですか？」

「あーっ、また新たなお客さんだね。今日は一般の人は入れないよ。貸切なんだから」

「貸切って誰にですか？」

「えらい方たちさ。私はそれしか知らされてない。だから、さあ今日はもう皆帰ってくれ。な、そのワンちゃんも、頼むから帰ってくれよ」

「わかったよ…」とその犬は言った。

その時ヒロシにはその犬が、見覚えのある犬に見えた。

「お腹空いてるのかい？」

「うん、もう2日間にも食べてないんだ…」

ヒロシはバッグの横のポケットを探った。

「あった。非常用のお菓子だけど、食べるかい？」

「あ、これオール・レーズンだね。懐かしいな。ボクそれ、大好き

だったんだ。いつも、夕方頃に、ある男の子が遊びの帰り際にわざわざそれをくれにやってきてくれたんだ。そしてぼくたちはしばしの間遊んだんだ。そして時々その男の子はくやし涙を流して僕の前に現れる時もあった。何が原因かは僕にはわからなかったけれど、でもそのくやしい気持ちはよく理解できたよ……」

その言葉を言い終わるか終わらないうちに、ヒロシがまわりを気にせずその白い犬に抱きついた。普段の常に落ち着いたポーカーフェイスのヒロシを知っていればこんな行動をとるのはとても珍しいとわかる。実際にその場面を見たシルビアもちよつと驚いているようだった。

「コロ!? キミはあの時のコロなのかい?」とヒロシが言った。

「うん、そうだよ。覚えていてくれてたんだね」

「ああ、忘れるわけがないだろう。ずっと覚えてたよ。まさか、ここで出会えるなんて……。でも、コロは確か……」

「ヒロシ、私にもちゃんと紹介してくれない」

シルビアがこれが限界とでもいうようにヒロシに話しかけてきた。

「ああ、シルビア。彼はね、子供のころの大事な幼なじみなんだ。子供の頃に、近くのダウンタウンのブロックの一角の家の庭にいつもクサリで繋がれていたんだよ。コロが散歩に出ている姿はまず見たことがなかった」

「うん、僕は番犬としてあそこの家で飼われていたんだ。だから他の家の犬のように一緒に散歩に行くことは滅多になかったんだ……。だから、いつも庭から他の犬たちが人間と一緒に楽しそうに散歩しているのを見るたび、それがとつても羨ましかったんだ。何で僕のご主人様は僕と一緒に散歩してくれないのになって……。今日こそは一緒に散歩してくれるかなって、そう期待して待っていると、食べ物だけくれておしまいだった。いつもその繰り返しだった。でも明日こそはきつと僕と散歩してくれるに違いないって、僕はあきらめたくはなかったんだ。……でも、やっぱり寂しかった。そんな時に、僕としばしの間遊んでくれたのがヒロシだったんだ。だから夕暮れ

頃に時々ヒロシが来てくれたおかげで僕はとつてもうれしかった。特にヒロシがいつもポケットに入れて持ってきてくれたオール・レズン、僕の好物だったんだ」

「コロ、僕もそれはおなじだった。キミと一緒にいる時間はいろいろなことが忘れて楽しい時間だった。今ここで、キミとこうしてしかも言葉を使って話せるなんて、こんなうれしいことなんてないよ」

ヒロシの目は少し涙ぐんでいた。

「ところでさあ、早くそれ、袋から出してよ。もう待ちきれないよ。ねえ、ヒロシ、早く」と言いながら、コロは前足を上げてヒロシにジャレついてきた。

「わかったよ。コロ、待って、座って。コラッ。お手をしてごらん。覚えてるだろ」

「やだよ。早く食べたいもん」といいながら、コロはしきりにヒロシに甘えてきた。

「いいなあ。…なんだか二人がうらやましい」

「そんなこと、言われたの…シルビアが初めてだよ」

「そう…。ヒロシ、あなたにはこういった大事な仲間がきつと世界中にまだまだたくさんいるんでしょうね…」

「仲間か…。それはわからないけれど、大事にしたい人たちはたくさんいる。シルビア、キミもそのうちの一人だよ」

「……ありがとう、って言ったほうがいいのよね、きつと…」

「シルビア…」とだけしかヒロシには言えなかった。

すると今度はコロがシルビアに話し掛けてきた。

「シルビアさん、僕はヒロシと出会えて幸せだったよ」

「そうね。コロ、私もそれはおなじよ」

そういうと、シルビアはコロの頭をなでた。そしてようやく微笑むことができた。

「ところで、シルビア、さっき言ってた紹介したい人ってだれの

ことだい。」
「え、あ、そうね、ついてきて、こっちの方角よ。」
そしてヒロシたちはその村の奥へと向かって行った。

S・07 ケイト

何か俺の顔に止まった。それで、俺は目が覚めた。手で振り払うと、陽炎のような虫があわてて飛び立った。

「ここはどこだ？」と俺は独り言を言った。でもそれに答えた声があった。

「ここが、ドリームランドよ」答えたのはさきほどのケイトだった。「まさか、俺はだまされないぜ。で、俺が寝ている間にどこに連れてきたんだ」

まわりにはところどころに低木や枯れた木々があった。故郷のニュージーランドに感じが少し似ていた。

「だから言ったでしょ、ドリームランドよ。二度も言わせないで」「ふざけんなよ。そんな非現実なこと、信じられるわけないだろ」と俺は女に言った。

「たしかに、ここは非現実的な世界よ。でも、こうして今あなたも私もその世界にいるのよ」

「…本気で言ってるのか!？」

「ええ、現実の世界で、私があるあなたにカシミラの枝茶を入れたの覚えてる?それにここに来る薬を入れたのよ」

「……」
たしかに、俺はさっき彼女が注いだといったたそのお茶を飲んだ。それからのことは覚えていなかった。

「さあ、まずはここから出発よ」とケイトが言った。

「どこに連れていくんだ」

「あるお方のところへよ。急がないと暗くなるわ」

「別に、暗くなっただってかまわないさ。もし夢だとして、起きれば

関係ないだろう」

「ハセ君、あなたはここがまだどんなところかわかってないからそういつてられるのよ。ここは、私たちのいる現実世界とは異なる世界なのよ。私を信じて。暗くなる前に、どこかの町に着かないと大変なことになるのよ」

「わかったよ。但し、そのあるお方とやらのところに着いたら俺を元にいた世界に戻してもらえるんだよな」

「ええ、そうよ。ここでの記憶や私たちと出会った記憶は失うけれど、それで元に戻るわ。約束するわ」

「O・K・じゃあ行こう。ミス・ケイト」

「ただのケイトでいいわ」

「O・K・ケイト。俺もただのハセでいい」

「わかったわ、ハセ。ユニークな名前ね」

しばらく歩いているうちにあたりがだんだんと暗くなってきた。

そういえば、太陽が見えない。曇っているんだろうか？

「まずいわね。明るいうちに町にたどりつけないかもしれないわ…」

ケイトの様子が先ほどとは違って変わって心細げだった。

「そういえば、暗くなったらどうなるんだ。ゴブリンでもでてくるつてののか？」

「ハセ、そういう想像はここではとつても危険なことになるのよ。

もう二度と言わないで。それに、彼らよりもっと危険な 恐ろしい ものがここには棲んでいるのよ」

「なんだって！？ ケイトはそいつを見たことがあるのか？」

「ええ、あるわ。たった一度だけね。遠くからしか見ていないし、でも二度とそれを見たいとは思わないけれど」

「それが、暗くなると出てくるんだな」

「ええ、低い声をあたりに響かせながら近づいてくるのよ」

「だったら昼間だって危険じゃないのか？」

俺はケイトに尋ねたところ、なぜかその生き物は明るいところには

出てこないらしい。そしてこの世界に住む人で、まだ明るいうちに
出会ったものはいないという。おそらく何か理由があってその生き
物は、明るいところには姿を現さないのだろうということだった。

「ケイト、あとのぐらいいで、町に着くんだい」

「はつきりとはいえないのよ。何しろここはドリームランドよ。距
離や時間はひどくおおざっぱなの。だから30分のときもあれば1
時間以上かかるときもあるのよ」

「えらくいい加減な世界だな…。ところで、さっき言ってたその生
き物だけれど、明るければ姿を現さないって言ったよな」

「ええ」

「だったら、ここで野宿をしよう」

「なんですって!？」

「2回も言わずなよ、ケイト。ここで野宿するっていったんだ」
俺はケイトにやっとニヤツと笑うことができた。

「もう信じらんない。私はいやよ。ハセ、気は確か?さっきも言っ
たでしょ、ここは暗くなると危険なところよ。なのになんでこんな
ところに…」

「じゃあ、一人で町に行くんだな。いつ着くかもわからないうちに
暗くなつて後ろからその生き物に襲われてもしらないぜ。俺はここ
で野宿する。それにこのあたりには、低木の枯木がけっこうある。
だから、薪には困らない。明るいときにはその生き物は出てこない
んだったら、ここで、キャンプファイヤを一晩すればいい」

「木を燃やすなんて、CO2が増えるじゃない」

「ハハハ、ケイトも、本気で今の政府の言うこと信じてるのかい?
俺の国では毎年広い範囲を野焼きしてる。それが伝統行事なんだ。
人が火を使つて何が悪いんだい。人間には火は不可欠な存在さ」

「……」

「それに、ここはドリームランドなんだろ。現実世界と違うならCO
2の心配も何もないだろう」

「ハセくん、それは人間のエゴというものよ。私たちは、今や世界に対して無責任ではいられない立場にいるのよ。だから、このドリムランドにおいても我々人間は責任を持って行動するべきなのよ」

「ああ、でも俺はやはり火をおこす。未来の心配をして、その化け物に襲われて、命を落とすたくはないからな」

「あなたは今日を生き抜ければ明日がどうなってもいいって言うの？」

「今日を生き抜くからこそ明日があるんだろ」

「……でも一体どうやって火を起こすつもり。私はライターなんて持っていないわよ。あなたは持ってるの？」

「いいや、そのもの持つてるわけないだろ。マッチ一本すら持っていないさ」

「じゃあ、一体どうやって火をおこすつもりなの？」

「人間には手があるだろ」

「手？ この手のこと？」

「ああ、そうさ。マオリ式で火をつくるのさ」

「なんですって！？ それに、『マオリ』って何よ」

「なあ、ここで話してたってますます暗くなるだけだ。支度にかかろう」

「…わかったわ。で、私は何をすればいい？」

「このあたりの枯れた小枝と乾燥しきった草を集めてくれないか」

「了解」

S・08 始まりの夜 S・09 村の住人たち

S・08 始まりの夜

San Francisco フィッシャーマンズ・ワーフ。

July・Early July (7月。まだ早い7月。

空はもうとつくに夏の気配を感じさせていた、しかし、このベイ・エリアはときたま太平洋に流れる寒流の影響で気温がまるで冬のように低くなる時がある。今日はまさにそんな日だった。

昨夜は旅の仲間とともにダウンタウンにある、その日泊まることにした格安のモーテル近くのスポーツ・バーに繰り出した。それにしても、その店内に入ったときは、平日の夜なのにテーブルもカウンターも満席だった。そして入り口を入れてすぐの左側の壁には大きな液晶画面があり、アメフトの試合が行われていた。ハセとクルミとリヨウそして俺の4人は空いている席をダメもとで、探してみた。すると、まもなく、

「ヒロシ、リヨウが席を見つけたみたいだぜ。ほら、向こうだよ」とハセが言った。満席だと思っていた一番奥の部屋にちょうど4人が座れるテーブルが1つ空いていた。本来は一番奥というのは常連客のテーブルなので、新参者としては少し気が引けたが、とりあえず座ってみることにした。

ここでちょっと旅の仲間を紹介しよう。今俺に声をかけたのがハセ。彼は仲間の中では、一番長い旅の仲間だ。背は俺よりも少し高くて、黒髪で、カンガルー皮のウエスタン・ハットを被っている。その帽子はかつてオーストラリアのエアーズ・ロックの売店で俺が

見つけ、ずっとかぶっていたもの。ハセと出会うまでは、主にヒッチ・ハイクや長距離バスなどを利用して旅を続けていた。また時には何十キロも歩いて旅したこともあった。しかし、ニュージールランドに着いて、その南島のキングストンという町で、彼と出会ってからは、彼の愛車で一緒に旅をすることになった。ちなみに彼は地元ではちょっとは知れたカーレーサーで、国際 A 級ライセンスを持っていた。彼はまた腕のいい車の整備士でもある。そして羊の毛刈りもかなりうまかった。それとグロッサリー・ストアに入ると主婦が舌を巻くぐらい経済的な買い物をする。また、どこからともなくジャンルを問わず格安な情報を見つけてくるのが得意だった。彼と一緒に旅をすることになってからは俺の旅は少しずつ変わってきた。そんなハセと出会ったのは、ふとしたことがきっかけだった。しかしそれはまた次の機会にでも話そう。

「ヒロシ、この店すごいわよ。カクテルだけでも 100 種類はありそう。ビールもざっと見、50 はありそうよ」
クルミがメニューを見ながら言った。

彼女は仲間の紅一点。ニュージールランドでハセと出会い、その後、ハセとともに今度はノース・カントリーのバンクーバーに向かった。その町に着いた早々にクルミとは出会った。次に会ったのはシアトルに行く途中のマウント・バーノンという小さな町外れのガソリンスタンドの隣にあるミニショップの入り口だった。金髪美人でスタイル抜群の容姿は、黒の上下のライダースーツでより目立っていた。そしてシルバー・カラーの TRIUMPH のバイクに乗っていた。その後、シアトルでも会い、さらにはポートランドに行く途中で会ったりと、いつの間にかよく旅先で会い、自然と親しくなっていた。しかし、彼女がなぜ一人で旅をしているのか？ ただの観光ではなさそうなのだが、俺もハセも彼女の個人的なことはほとんど何も知らなかった。唯一知っているのは、食後や休憩で立ち寄るカフェで彼女が頼む飲み物はいつも決まって、カフェマキアート、

かエスプレッソだった。けれども時々興奮したときの彼女の話し方から考えると、東海岸で育ったのではないかと思う、あまり自信はないけれど…。

「ねえ、ステイン・ラガーなんてあるよ、これハセの国のビールだよ」とリヨウが言った。

リヨウは、ポートランドの孤児たちのリーダーだった。リヨウとの出会いも一波乱あったが、それもまた、いつか別の機会に話そう。

「それは、スタイン・ラガーって呼ぶんだ。懐かしいな…。俺はこれにするよ」

ハセが故郷のブランドのビールに決めた。

「でも『Stein Lager』って綴ってあるよ」とリヨウがくいさがる。

「<ei>はアイってキウイたちは発音するんだよ」と俺がリヨウに教えると、

「キウイって？」とクルミが尋ねてきた。

「ニュージーランド人のことをよくそう呼ぶのさ」と俺がクルミに説明した。

「ねえ、クルミちゃんは何にするか決めたの？」とリヨウが言った。

「そうねえ、普段はあまりビール飲まないからなあ…」

「たまにはいいんじゃない。」とリヨウ。

「そうね、ヒロシ、何かお勧めのある？」

「そうだなあ…」といいながら、俺は席を立ちカウンターへ向かった。

こういうときはメニューよりも実際にカウンターの中の冷蔵庫の中を見たほうが手っ取り早いからだ。そして、俺はバーテンにある銘柄を注文した。

「何かあった？」とクルミがたずねた。

「ああ、ちょうど良さそうなのがあったよ」

「なんて銘柄なの？」と興味深げに、再びクルミが聞いてきた。

「『ブルームーン』っていうビールだよ」

「なんだか今夜にふさわしい銘柄ね。どんなビールなの？」

「この大陸に来て、初めて聞く名前だな…」とハセがつぶやいた。

「おいらも知らないな」とリヨウ。

「それはきてからのお楽しみさ」と俺がクルミたちに言うと、

「なによ。ヒロシのいじわる。ちよつとぐらいどんなのか教えてく
れてもいいでしょ」

クルミがちよつと不満げに俺の顔を覗いた。

「飲みやすいビールだよ。特に普段ビールを飲んでない女性にはね」
それにしても隣のテーブルが騒がしい。さつきから、スクリーン
上の試合でタッチダウンの度に、ビールを持つ手とは逆の手でテ
ブルをたたいては呻いたり、歓声をあげたりしている。そこでその
隣にいる40半ばの男性にたずねてみた。すると、地元の大学のチ
ームが15年ぶりに決勝まで残った大事な試合の最中ということだ
った。おそらく、その晩テーブルを埋め尽くしている客のほとんど
は地元に住む客だろう。

「なるほどね、地元のチームじゃしょうがないな。俺の住んでた国
でもラグビーの試合ともなるとまさにこんな感じだったからな」
ハセが言った。

「ところで、あなたは何を飲むか決めたの？」

クルミが俺に尋ねてきた。

「ああ、クアーズにするよ」

「じゃあ、おいらはブルーにする」とリヨウ。

「ダメ。リヨウは未成年だろ」と俺が言うと、

「えー、そんな…」とリヨウが悔しげにつぶやいた。

「未成年でアルコールを飲み続けると体の成長止まるわよ」とクル
ミが言った。

「でも、今日だけ。ね？」

「だめだ。それに、未成年にお酒を与えたら、ここの店に迷惑かか
るんだぞ」とハセ。

「あれ、そうだったけ？」としらじらしくリヨウが言う。

「リヨウ、ポートランドでの一件、まさか忘れたとは言わせないぞ」と俺がいうと、ハセが続けて、

「ああ、あの二の舞はもうごめんだからな」と続けた。

「わかったよ。コーラでいいよ、でもバーボンをシングルで」

「ダメよ！」とクルミ。

「じゃあ、1滴だけ」

「だめだ」とハセ。

「じゃあ、せめて、ライムを入れてよ」

「それなら許可する」

ハセとクルミと俺は口を揃えて言った。

「ちえっ、みんなつれないよな。おいらはいつになったらお酒飲めるのさ」

「それは、大人になってからよ、リヨウ坊や」

クルミがちよつとからかうように言った。

「大人って何才からさ」とリヨウ。

「そうだなあ、国や州によって違うけれど19から21才ぐらいだよ」

「13才から大人っていう国はないの？」

「残念ながら地球上にはないようだな」とハセが言った。

「ほんとうに？」とリヨウが俺に聞いてきた。

「ああ、俺が知っている限りはね」

「ついでにいうと、月面にも、この太陽から100光年の間にもないわよ」とクルミ。

「チエーツ」とリヨウ。

「いいかい、みんな、あんまり飲みすぎるんじゃないよ。酔っ払いの介護なんておいらはまっぴらごめんだからね」とリヨウが言った。

「ああ。ポートランドでのリヨウみたく、酔って意識がなくなるよ

うなへマはしないから安心しな」とハセ。

「本当よ、まさかテキーラを水と間違えるなんてね、もう信じられないわよ」

「もう、その話は勘弁してくれよー」

リヨウが呻いた。

S・09 村の住人たち

「さあ、ここよ。ヒロシ」とシルビアが言った。

ヒロシとシルビアそしてコロという人間の言葉を話すヒロシの幼馴染の犬は、その町の奥に進んだ。するとそこには林があり、その林を歩き出すとまもなく、そこはまるで、中世かファンタジーの魔法世界のように、左右不釣り合いな、白い石を積み上げてできた塔があった。

「シルビア、一体ここはなんだい？あわせたい人って？」

「まあ、入ればわかるわよ。さあ、中に入りましょ。コロ、あなたはこここの入り口で周りを見張っていて。もし、誰か来たらすぐに知らせてね」

「コロ、ごめん。でも万が一のためにお願いするよ」

「…うん。ここは任せてよ」

そして二人は中に入った。その中央には螺旋階段があった。その周りには机から床まで、所狭しとたくさんの本が折り重なっていた。壁には見慣れない文字で書かれた羊皮紙などが張られていた。上で足跡が聞こえた。やはり、誰かいるようだった。

「ベルナー、私よ。そこにいるんでしょ」

シルビアが口を開いた。

「やあ、久しぶり。シルビア。元気かい？　ん？　キミの隣にいる者は誰だい？　みかけない顔だな」

「彼なら大丈夫よ。私の家族も同然の人だから、ベルナー、彼はヒロシよ。ヒロシ、彼がベルナーで私が合わせたい人って彼よ」

「そうか、よろしく、ヒロシ」
「「じちら」ぞ、よろしく」

塔の3階の部屋。その端にあるソファに座って3人は紅茶を飲んで
いた。

「ん？ これキーモンティーじゃないか。幻の紅茶って言われる中
国の紅茶だ」

「ほう。よくわかったね」とベルナーが感心して言った。

「彼は、あれでもイギリス出身なのよ、ベルナー」

「なるほど。キミは祖国でもこれを飲んでたことがあるんだね」

「ええ、子供のころに、アフタヌーン・ティーの時間に」

「アフタヌーン・ティーの時間にですって？」とクルミがたずねた。

「英国民は紅茶好きだからね。1日に何回も紅茶を飲むんだよ」と
ベルナーがいうと、それにヒロシが付け加えて

「そう。うちでは朝は決まってオール・グレイ・ティーを飲み、昼
には、アッサム・ティーかダージリン・ティーを飲み、午後の3時
頃に、近くの住人がティー・ルームに集まり、メイドたちがたくさ
んのクッキーなどと一緒にいろいろな種類の紅茶を入れてくれて飲
んだよ。その時にこのキーモン・ティーもときたま飲んだことがあ
った」

「そして、夕食後にまた、デザートと紅茶を飲むわけだ」とベルナ
ーがいうと

「そのとおり」とヒロシが答えた。

「お腹がタポタポになりそうだね。ところで、ティー・ルームに集
まってメイドたちがクッキーを出しているいろいろな種類の紅茶ですっ
て!？ ヒロシ、アナタのうちって…」

「うちのことはどうでもいい。それよりも、僕はたしかシルビアの
家で、カシミラの枝茶を飲んでたはずだ。そのあと気を失って…」

「気づいた時にはキミはここにいたってわけか、お気の毒に。いや、
歓迎するよ、ヒロシ。でも驚いたろう。こんな世界があるなんて」

「じゃあ、やっぱりこの世界は夢なんかじゃないんですか？」

「いや、ややこしい言い方だけれど、ここは『ドリームランド』と呼ばれている世界で、我々の普段生活している世界とは別次元の世界のように思える」

「ここには、誰でも入ってこられるんですか？」

「ああ、基本的にはね。実際1回ぐらいは誰でもはいつているんじゃないかと思うね」

「でも大抵はただの夢の出来事と思ってそれでおしまい。まず続けてここに訪れることはないでしょ。たとえば、また来たいと思ってその方法がわからないしね」

シルビアが続けた。

「けれどもごくまれに再びこの世界にやってくる人たちがいて、徐々にこの世界を探検する者たちが現われてきたんだ」

フロイトも実はこの世界に度々訪れたことのある者たちの一人だったという。そこで、夢を研究する者たちによって、どういう状態で寝るとこの世界に来られるのか長年調べられてきた。この世界に入っているときの人間の脳波や心拍数や脳内物質の変化などといった具合に。そして徐々にこの世界にはいるきつかけがわかってきた。それはレム睡眠中に起こり、特にシータ波がよく出ている状態のとき、またそのときの呼吸数は1分間に5、6回のときにみなこの世界に入っているということだった。しかし、レム睡眠はノンレム睡眠と一晩に4、5回交互に起こるので、そう長くこの世界には居続けることができないだろうと考えた研究者たちが、まずレム睡眠とノンレム睡眠との繰り返しを少なくさせる薬の開発に取り組みやがてそれは成功した。さらに最近ではレム睡眠がノンレム睡眠に比べ長く続く新薬が完成した。それでもレム睡眠に入るまでは通常は2時間はかかった。

しかし、あるとき、たまたま温かいカシミラのリーフ・ティーで

その新薬を服用したところ、通常の約半分の時間でレム睡眠に入ることができたという。その後、研究者たちはいろいろな飲み物でこの新薬を試してみたところ、カシミラの枝茶を飲んだ時がリーフ・ティーよりもより早くレム睡眠に入り、このドリームランドに入ることができた。

「 というレポートがあがってきている。しかし、なぜカシミラの枝茶が最も有効なのか、実は今のところよくはわかっていない。おそらく、その中の何かの成分が人間の脳に刺激を与え、作用するんだらうと考えられる」

「すると、やはりここは夢の中なのでは…」

「ああ、私も最初はそう思っていた。しかし、ここには肉体もあり、食事をすることもできる。そして、ここで起きたことは記憶に残り、さらに悪いことに…」

そこで一度ベルナーは口を閉ざした。

「悪いことについて、その先を言ってください」

「この世界で怪我をすると、それは現実の世界でも同じ所が怪我をしていたという報告が数多くある」

「なんだって！？それじゃあこの世界で死ぬと…」

「ああ、おそらく、二度と現実の世界で目を覚ますことはないだろう」

「そんな…。ということとは、ここはやはりどこか別の世界でそこに今僕たちは移動してきているっていうことなのですか？」

「いいや、そうでもないらしい。実験では被験者の肉体は、意識こそなかったが、そのまま消えることなくその場所にずっといたという結果だよ」

「そのとおりよ。でも心配しないで。今頃は、マスターがあなたの体をベッドに寝かせているはずだから」

「だったらなおさらこの世界で怪我をしたとして、現実の世界でも

怪我をしているなんてありえないのでは……」

「キミは『オベール司教の話』を知っているかな？」

「オベール司教っていうと、フランスのあの有名なモン・サン・ミッシェルに最初に礼拝堂を建てたといわれる方ですか？」

「ああ、その通り。キミは大した物知りだね」

「ヒロシはね、世界中をずっと旅しているのよ、ベルナー」

「ベルナーさん、話を続けてください」

「ああ、古い話だが彼もまたこの世界に足を踏み入れた人物だろうと我々の間ではそう認識している」

「まさか、そんな話はきいたことないな」

「オベール司教には有名な話が残っているだろう」

「ねえ、二人とも、そのオベール司教の話って一体なんなの？」
シルビアがきいてきた。

「ああ、簡単にまとめるとこんな話だよ」

西暦708年のある晩のこと。当時アヴランシュの町の司教であったオベールの夢の中に大天使ミカエルが現われて、当時はモン・トンプと言われていた、ノルマンディー地方の岩山の島の上に教会を建てるように言われたんだ。最も当時のオベール司教もそんな夢のことなどたいして気にしなかったらしい。それからしばらくすると、オベールは夢の中で再び大天使に会い、同じことを言われたが、このときもまた、オベール司教は単なる夢だとは思わなかった。すると、三度、夢の中に大天使は現れ、オベールが自分の話を単なる夢としか思っていないことに対して、これがただの夢ではない証として彼の額の頭蓋骨にミカエル自身の指で穴を開けたという。

「で、結局どうなったの？」とシルビアがその先をせかした。

「オベール司教が起きた時に額からは血が流れていて、その額の骨

には穴が開いていたんだ。それで、ようやくこれは神からのお告げだということを理解してその言葉に従って礼拝堂を作り、それがやがて、巡礼地になり、教会も大きくなりその地名もその出来事にちなんでモン・サン・ミッシェルになったんだ。でもまさかその夢っているのがこの世界だっているのですか？」

ヒロシがベルナーに問いかけた。

「確かにそうだという証拠は何一つない。だからといってまんざら否定もできないんじゃないかな。その理由として彼は同じ夢を3度も見ている。さらには夢の世界で肉体に傷をつけられたところが現実の彼の体にも同じことが起きている。この2つのことに納得のいく説明をしたものはいない。しかし、この世界に彼が来ていたとしたら十分理解できることだとは思わないかい？」

「…どう思うかね？ シルビアは」

「んー、正直言つて私には難しすぎてよくわからないわ。でも、たしかに今私たちは現実とは違う世界にいると思う。そしてこれがヒロシの夢の中の出来事ではないってことだけは言えるわ」

「でもね、それさえもここでは証明できないんだよ、シルビア」
ヒロシが言つ。

「では、私とその頭の固いヒロシの頭蓋骨に大天使ミカエルに代わって穴を開けてさしあげましょうか？」

「ゲツ!?! それは遠慮しておくよ」

「じゃあ、ヒロシはこの世界を認める気になつたってわけ？」

「ああ、わかつたよ。とりあえずは認めるよ」

「とりあえずね。まあいいわ。少しは前進したわね」

「シルビア、ヒロシ君が疑うのも無理はないさ。キミだってはじめでここに来たときは全く信じてなかったじゃないか」

「なんだ、シルビアもそうだったんじゃないか」

「まあはじめはね。でも今は信じてるわよ。この世界があるってことを」

「それはどうしてだい？」

「だって、あのサプリメントを飲むことによつていつだってこの世界に来ることが出来るんだから。ただの夢ではこうはいかないわ」
「でも、さっき僕はコロに出会った。彼は犬だ。それなのに人間の言葉を話すしそれに現実の世界ではもうとっくの昔に亡くなっている。これはどういふことなんだい」

「だからこそこそを『ドリームランド』って人々が呼んでいる理由なんだよ。この世界は人間のいや、生き物の思念によつてできているのかもしれない」

「生き物の思念？」

「そう。生きとし生けるもの全ての思念が集まる世界。それも具体的な形になつて表れる世界。しかし、人の思念は時として不完全で曖昧なものだから、この世界も必然的に曖昧になっている」

「だからこの村にたどり着くのも予想外に長かつたわけね」

「ああ、おそらく。だから、死んだと思つたものともここでは出会えることがある」

「死んだと思つたものって…」

「私はここに来てから人間の生と死についていろいろと考えるようになった。そこで今では、こう考えている。魂というものは本来は不滅なんじゃあないかつてね。確かに現実の世界では人はいつか亡くなる。けれども、それは我々の世界での出来事にすぎない。だからこの世界では人の魂は、いや生き物の魂はまだ存在している。だから、さっきヒロシが出会つたように、現実では二度と会えなくなつたものたちともこの世界では会うことができるんだよ」

「それがもし本当なら、ここはとてもすごい世界なんだな」

「ああ、私が今達している結論ではそういうことになるよ」

「だから、私はここでベルナーにあることを協力してもらっているの」

「シルビア？ あることつて？」

「それはね、アイリーンに会うことよ」

「アイリーンにだって!？」

…くうくうくうくう

S・10 火付けの思い出

S・10 火付けの思い出

「ふうん。それが、マオリとかいうやり方なの？ 時間がかかるのね」

横で足を崩して座っていたケイトが、今、俺がなんとかして、両手で枝を回しながら、火をおこそうとしているのを眺めながらそう言ってきた。

「これがマオリの火の起こし方なんだ。昔からのやり方だって、近くに住んでいたマオリ族の友人から前に教えてもらったことがあったんだ。」

枝を回し続けてからもう10分は過ぎただろうか。

もうだいぶ回りは暗くなってきていた。それにしても周囲には全く人工的な明かりが見えなかった。マジでこんなところで明かりがなかったら、化け物どころか、コウモリや野良犬がきてもわからないぞ。ケイトにいった手前、何とかして火をおこさないと…。

「で、そのときはどうだったの？」

「え！？」

「だから火はちゃんと点いたの？」

「ああ、点いたよ。 - 友達のはね…。」

あれは今からもう10年以上も前のことになる。

俺の隣では、今、俺よりも1つ年下のこのあたりのマオリの族長の娘のナルアがいかにも簡単そうに木の枝を使って火をおこしている。なのに俺のほうときたら全く煙すら出てこない。なんでだ！？

なんで、ナルアのほうには簡単に火が点いて、俺のには点かないんだ。そう思っただけで躍起になって木の枝をがんばって回しているとな

んとか煙が出はじめた。けれども俺の両手の平はマメもでき始めそろそろ限界になってきた、そのときだった。

「お兄ちゃん。いつまで私を待たせるの。早く行かないとスーパー閉まっちゃうでしょ」

ちっ！と俺は舌打ちしたが、俺の体はとりわけ両の手は妹の声をあまりがたく感じていた。

「ごめん、ナルア。残念だけれど、今日はもう行かなくちゃならない」

するとナルアは微笑んでこう言った。

「いいよ、ハセ。火っていうのはね、マウイの勇敢な行いで火の女神マフィカから奪い、人間にあたえられたものなの。だから決して火は私たちのもとから去ることはないわ。いつかハセが火を必要になったときに願えば、火はきつと現れてくれるはず。妹を待たせるのは、感心しないことよ。だから、早く行ってあげて」

「ありがとう、ナルア。次こそ火をおこしてみせるから。じゃあ、また今度な」

「ええ……。さようなら、ハセ」

けれど、その後、俺はナルアの前で二度と火をつけることはできなかった。それはその数日後の夜に、ナルアは道端で車に跳ねられて死んでしまったからだ。ナルアはその日の夜、仲間たちと一緒に魚を獲った帰り道、月明かり越しに、道端を見るとポッサム（有袋哺乳類で日本ではフクロギツネとも呼ばれる）の子供を見つけたらしい。するとそこにトラックがもうスピードでやってきて、そのポッサムの子供を引こうとしていたのに気づき、ナルアはとっさにそのポッサムをかばおうとしてトラックとポッサムの間に入り、なんとか間一髪で助けたらしい。だが、その直後にさっきのトラックが急に、バックで突進してきて、ナルアを撥ねたという。後になつてから俺はナルアの仲間たちからそれを聞いた。

「じゃあ、ハセ君、キミの火はつかなかったってわけ？」

「あ、いや、その…つまり、あともう少しだったんだよ。煙までは出てきたんだけど……」

「そうなの。キミは私を騙したのね」

「それは違う！ 騙してなんかいない。このまま頑張ればちゃんと火は点くはずだ」

「あなたの専売特許だけれど『もし』火が点かなかったらどうなるかわかってるんでしょうね」

「絶対点けて見せるさ」

「そう。で、あとのぐらいで、火は点くのかしら？」

「そ、それは…」

「あたりが暗くなる前に点けなさい。これは命令です。いい？」

「ちつくしよ〜！ わかったよ。ぜって〜に点けてやる。つけりゃいいんだろ！」

「そうよ。男なら、自分の言ったことに責任を持つことね」

「ああ、わかった。ナルアに誓って今度こそ火を点けてやるから、そこで黙って見てるよ」

それからしばらくして、煙が出てきた。

「ケイト、乾燥した小さな葉や茎をこの煙の周りに寄せてくれないか？」

「ええ、これでいいかしら。頑張って頂戴。もう少しみたいね」

やがて、その勢いを増した煙の中から明るいオレンジ色の光がポツポツと見え始めた。俺はナルアがしていたように、大きく空気を吸うとその煙の中へ空気を何回か送った。するとついに火が点いた。

ナルア、だいぶ遅くなったけれど俺はついに火を点けることに成功したぞ！

「よく頑張ったわね。ハセくん、それでこそ男っていうものよ」

「ハハ、な〜にこれくらい晩飯まえさ」

でも、今俺はとっても感動していた。自分で自分をほめてあげたい

っ！

「ハセくん、手を出しなさい」

「え！？」

「両手ともよ」

「火が点いたからもう俺は用済みってことでまた俺を縛るのか？」

「いいから早く両手を私に差し出しなさい」

「……」

俺はしぶしぶ両手をケイトの前にさしだした。

「ほぐら、やっぱり血が出てる」

ケイトは彼女の首もとの高そうなシルクのスカーフをとると、真ん中あたりを口にくわえて二つに引き裂きはじめた。

「なに、やってるんだよ」

「あなたの手のひらをこれで巻くのよ」

ケイトは俺のママのつぶれた両手のひらを覆うようにスカーフで縛ってくれた。

10分後。

「どづ、血はとまったかしら？」

「ああ、ありがとう……」

「ところで、さっき、ナルアって言ってたけれど、ナルアって誰なの？」

ケイトが尋ねてきたので、俺は薪をくべながら、ナルアとのことをケイトに話した。

「そうだったの…お気の毒に。でもなんで、そのトラックはわざわざバックまでしてそのポッサムっていう動物をひこうとしたの？」

「それは、あの国では『ポッサム』はひいて殺してもいい動物だからなんだよ」

「つまり、害獣ってこと？」

「ああ。けれどお隣の国ではそのポッサムは『絶滅保護動物』とし

て大切にされているんだ」

「だったら、その国に送ってあげたらいいのに」

「もともとポツサムはその国からやってきたんだよ」

「どういうこと？ もっと詳しく聞かせてくれない？」

そこで俺は、時間もたっぷりあることだし、ケイトに詳しく説明を始めた。

その隣の国ではポツサムは人が入る前までは、それなりに繁殖していた。そこにヨーロッパから人々が住み始め、最初は流刑地になり、やがて、英国の貴族たちの狩場としてウサギや小動物を放つたらしい。また、ポツサムの毛は柔らかく中が空洞になっていて、空気が入ることにより、とても保温性があった。だから、この土地では、古くは原住民のアポリジニたちに、やがて、ヨーロッパの貴族たちにまで毛皮をとる目的で狩猟されるようになっていった。

またウサギはウサギで運よく狩られることなく逃げ延びたものから、その新しい大地で数を増やしはじめ、大事な木の芽を食い荒らし始めた。畑の作物などの被害も少なくなかった。そこで、人間たちは次に、ヨーロッパからウサギの天敵であるアカギツネを持込んだ。しかし、アカギツネはウサギだけでなく、その国の固有種の小動物までも狙い始めた。それと、体内に毒をもつオオヒキガエルも放った。そのカエルを食べたらまず食べた動物は助からない。ポツサムという有袋哺乳類はもともとその国ではデインゴやオオトカゲに狙われていた上にそこに新たにアカギツネが現れ彼らからも狙われ、雑食のため、オオヒキガエルなども食べてしまい、みるみるとその数を減らしていった。そしてこのままでは全滅してしまい、毛を売ることができなくなると恐れたその国の商人たちは、ポツサムを隣の国、つまり俺の住んでいた国へもって行き、放ったところ、天敵が全くないなかったため、あっという間に今度は繁殖していった。そして、その雑食という性質上、今度はポツサムがこの国の固有植

物の芽や木の葉や飛べない鳥の卵などを襲って食べるようになっていったんだ。

「 だから、もとの国に戻し放したところで天敵に襲われるだけなんだよ」

「 でも、ハセの国では人間に殺されていく運命なわけよね」

「 ああ」

「 かわいそうな生き物ね。人間の都合によって、殺され、少なくなつたからって、元の場所から運ばれ、今度は増えすぎたからって、殺されてもかまわないなんて…」

「 それこそが人間のエゴってもんだろ。でもそんな動物はまだまだ他にもいる。鹿にしてもオオカミにしても、そうじゃないか」

「 そうね。そう考えると人間はまだまだこの地球上では責任感のない生き物なのかもしれないわね。そしてずいぶんと我がもの顔でこの地球で暮らし続けてきたのね」

「 けれど人間の時代もいつかは栄枯盛衰になるさ」

「 エイコセイスイって？」

「 永遠なんてない。いつかは滅びるといって、日本語の四字熟語さ。おそらくヒロシならこんなときにこういうんだらうなって思ってたね」

「 ヒロシって、キミのお友達？」

「 ああ、このポッサムの話も実を言うと彼から聞いた話なんだ。ヒロシは俺なんかよりもよっぽど俺の国のことを知っていた。それに今いるこの国のこと…現実のね、それや他の国にしても…。とにかくなんだって彼はよく知ってるんだ。ヒロシは、俺にとってのハックルベリーでもあり、兄のような存在さ」

「 そう。そのヒロシ君にも一度会ってみたいわね」

「 きつと今に彼のほうから現れるさ」

「 まさか、ここはドリームランドの中よ」

「 ああ、わかっている。でも、なんだか俺にはヒロシもすでにこの世界に来ているんじゃないかって、俺はこの世界に来てからずっと

そんな気がしてる。なぜだかはわからないけれど。ここからそう遠くないどこかにいるようなそんな気がしてるんだ」

俺はケイトに自分が思っていることを正直に話した。それにケイトに対して初めのころ抱いていた警戒感も今ではなくなっていた。

「そう。そうかもしれないわね。ここはドリ・ムランド。夢がかなう世界なんだから。私もそう言われればそんな気がしてきたわ。ハセ、そろそろ交代で寝ましよう。明日明るくなったら、さっそく街まで向かうから。まず、ハセ君あなた先に寝なさい」

「いや俺はまだ眠くないから、それよりもケイトこそ眠たそうな顔してるから先に休みなよ。俺ならずっとここに居るから」

それにはケイトは答えなかった。

「俺は男だから自分の言ったことには責任を持つ」

「わかったわ。あなたを信用するわ、ハセくん」

「ありがとう、ケイト」

「おやすみなさい」

ケイトはそういうと横になった。

あたりは不気味なくらい静まり返っていた。

7話目につづく…

S・11 アイリーン

S・11 アイリーン

「ふうっ。こういうときは小さな家でよかったと思うね」

先ほどリビングルームの丸テーブルで薬によって眠らされたヒロシの体を、マスターKはやっとリビングルームのソファに運び終えたところだった。

「シルビア、ヒロシを頼んだぞ。いや、待てよ…この場合、ヒロシにシルビアを頼んだほうがいいのか？」

（ま、どっちだっていい。二人が無事でまたこの世界に戻ってきてくれさえすればそれでいい。そうだよな、アイリーン。）

書齋に飾ってある、1枚の写真に向かってアイリーンズ・バーのマスターはそう話しかけた。それには、30代半ばらしき女性が熊のぬいぐるみを抱えた4、5オぐらいの女の子を抱きかかえた姿が写っていた。その写真の女性は女の子をとても大事に愛していることが見てわかる、そんな写真だった。その写真の人物こそがアイリーンだった。そしてこのcaf? barの名前にもなった人物だった。

「アイリーン、シルビアももうすっかり一人前の女性になったよ。そろそろ俺の役割も終わりだな。今まで、シルビアが独立できるまでって何とか頑張ってこの店を守ってきたが、そろそろ潮時のようだよ」

マスターはアイリーンの写真に向かって語りかけた。

今から18年前。

あれはある雨の降る晩だった。そうさ、アイリーン。キミがはじめてここのバーのドアを開けた日だ。

「いらつしゃい。ずぶぬれじゃあないか。さあこつちのテーブルにどうぞ。今、タオルを持ってきますから」

そういつて俺はカウンターの奥から、乾いたタオルを2枚、キミとキミの抱えた女の子に渡したんだ。あの時の事は今でもよく覚えてる。するとキミは

「ありがとう。シルビィー、あなたもおじちゃんにお礼をいいなさい」

つて言ってくれた。すると

「おじちゃん、ありがとう」

とキミの愛娘の幼かったシルビアがはじめて俺に話しかけてくれたんだ。

「さて、何かご注文は？」

と俺が聞くと、キミはメニューを隅々まで見て、ちよつと後に、

「ハチミツ付のバター・トーストを1枚、それとお水を」

つて言った。それで俺には彼女の状況が少しわかった気がした。本来ならデイナータイムだし、断るところだったんだが、このときはそうしなかった。カウンターの店員も

「これ、モーニングのメニューでしょ？ よく受けましたね。それに、ずいぶんと厚く切りましたね。ひよつとしたら彼女つて、マスタアのタイプです？」

「バカヤロー。余計なことを考えるな。それよか、早くジョッキが冷たいうちに向こうの客にさつさと持っていけ」

そして俺はたつぷりとバターを塗ったトーストにハチミツを沿えて、キミのいるテーブルに持っていった。

「さあ、どうぞ、召し上がれ」

それをキミは丁寧にナイフで半分に分けて、片方にはハチミツをたっぷりかけ、愛娘に食べさせはじめた。そしてキミは容器に余ったハチミツを右の人差し指でとると、今度は自分のトーストに塗りつけ食べ始めたんだ。それから、店が忙しくなって、気がつくとも2時間後、まだキミたち親子はそこにいた。そして、結局は閉店の

午前0時までキミたちはずっとそのテーブルにいたんだ。その間無料のお水だけを3杯もおかわりをして。まだ幼かったシルビアはキミの横でもうすっかり寝ていた。

「あのう、すみませんが、もうそろそろ閉店時間になるのでお代をもらってもいいですか？」

と俺が言うと、

「ええ、そうね、おいからかしら？」

と妙にきどった声で返してきた。その声が彼女の格好と不釣り合いだったのでちよつとおかしくって俺は

「はい、1ドル80セントになります。マドモアゼル」

つてこちらにもホテルのラウンジのボーイのように気取って答えただ。

「アラツ！？ あんなに量があつたのに。とってもお安いのね」

キミはちよつとびっくりしたようだった。

「ええ、お客様のご注文した品は当店の今夜だけのスペシャル・メニューだからです」

「……アナタ、とってもやさしいのね……。チップたくさんはずんじやおうかしら」

さきほどと変わらずにまるでロデオ・ドライブあたりで買い物をするマダムたちのような口調でキミは言ったんだ。

「いいえ、結構ですよ。マドモアゼル。そのお気持ちだけいただいております」

と言うと俺はその場を去った。そして、次のテーブルでつぶれているお客のところに行き、何とか起こしてお代をもらおうとしていたときだった。突然、バーの隅においてある、ほこりのかぶっていたピアノが久々に音を奏でた。

振り向くと、そこにキミがいた。そして軽く鍵盤に指を下ろすと信じられないぐらい、流れるようにエヴァンスの「I LOVE YOU、PORGY」を弾きはじめた。それはこのBAR始まっ

て以来の上等なメロディーだった。そしてこのダウンタウンの小さなBARを一瞬でマンハッタンにあるあのブルー・ノートの会場のようになってしまう。カウンスターでも、

「お代は全部で18ドルになります」

俺は帰ろうと席を立った客に言う、

「…やっぱり、さっきのもう一杯頼むよ。誰だい、あのコ？ ともうまいじゃないか」

と言って、再びテーブルについてしまった。

また、数名の常連たちの雑談もピタツとやんだ。誰もが彼女のその繊細でかるやかなそのピアノから流れてくる心地よい旋律に耳を傾けた。

約10分近くの曲が終わると1テンポ遅れてその場から拍手が沸き起こった。そして2曲目では「NOT MEANT TO FALL」を弾き始め、ボーカルも披露してくれた。そして彼女はレコードの60年代のジャズ・シンガーのようなヴォイスに現代のニューヨークを生きる者たちの憂いをまぜたような声で軽やかに、時にはせつなく歌い続けた。その声は小さな店の中では納まりきらず、深夜の町へとあふれ出していった。その彼女の声を店の前をたまたま通って聞いたものたちが次々と入ってきた。そして彼女がその後2曲を歌い終える頃、店の中は満席どころか立ち見の客であふれていた。

その1時間後、店を閉めるときに、

「そっぴや、名前をまだ聞いていなかったね」

と俺が彼女に尋ねると、

「アイリーンよ」ってキミは微笑んで答えた。

「そっか、アイリーン、あんたの曲、とっても良かったよ」

「そっ。良かったわ」

「失礼。俺はあまりそっちの業界のことは詳しくないんだけどキミは、ジャズ・シンガーなのかい？」

それにはキミは答えなかったから、俺は今でもキミの過去は知らない。

「で、これ良かったらとっついてくれないか？」

そこで俺は今晚彼女がピアノを弾き始めてからの売り上げから少し分け前を渡そうとした。そして

「それなら、さっきの料理のチップにあなたにあげるわ。それよりも、今晚泊まる場所紹介してくれない？ もちろん安いところがかまわないから」

って言った。それから俺は、

「そうだな…。正直言つてこのあたりにはモーターはあるにはあるが…今の時間、小さな女の子を負ぶって歩いていくのは薦められないな」

「そう…。困ったわ。ここら辺なら安宿があるって思ったんだけど…」

「けれど、一軒いいところを知ってるよ」

「ほんと？」

「ああ、この裏にあるトレーラーハウスなんだけれど…」

「トレーラーハウス？ B & Bか何かなの？ そこつて安いのかいくらぐらい？」

「さあ、それは…。でもたぶん今なら、ただなんじゃないかな？」

「まさか！？ からかわないですよ。いまだきただで貸すモーターなんて聞いたことがないわ。そんなオーナーがいたらぜひ顔を見てみたいわ」

「…それなら、もう見てるぞ」

それから、まだそのときは新しかったこのトレーラーハウスの、今シルビアが使っている部屋を俺はキミたち親子に提供したんだ。

その翌日の夕方、キミはまた店に現れると、今度はすぐにピアノに向かった。その夜の売り上げは、この店始まって以来の大盛況だった。キミはピアノを弾き、歌い、また、歌わないときは、ジヨー

クを言い、周りの客を笑わせた。そのうわさは瞬く間に人から人に広がり、それからの数年はこのアイリーンズ・バーの黄金時代だった。キミに提供した部屋はいつしかそのままキミとシルビアの部屋になっていた。俺もそれでよかった。どうせ男の一人暮らしだったし、キミはなかなかチャーミングな女性だったし、シルビアもとてもかわいかった。また、住み込みということで、給与も少なからずんだ。それにはキミも不平を言うこともなく、毎晩ここで歌ってくれていた。一度取材に訪れた雑誌記者がいたけれど、それにはキミは一切の取材の許可を与えなかった。不思議には思ったが、それでも十分なほどお客は毎晩入っていたから俺も満足だった。それからキミも俺も半年後にはだいぶ懐が温かくなっていた。しかし、キミはというと、その生活はとつてもきりつめていたね。店に出るとき以外の服はほとんど買っていないようだったし、昼間はもっぱらTシャツにジーンズにスニーカーといういでたちだった。俺はそのときは不思議に思ったものだった。しかし、その答えは数年後にはつきりとした。

その数年後の初夏のある日の午後、いつものようにキミは洗濯をした服を乾かそうと庭に干そうとしていた。

「マスター、洗い物、たまってるんじゃないの？　こんな天気の良い日に干さないなんて手はないわよ。まだ、シルビアの分あるからついでにやっておくわよ」

「ああ、ありがとう。それじゃあ、お願いするかな」

「じゃあ、すぐにランドリーまで持ってきてね」

しかし、俺が洗い物をランドリーまで持っていくと、アイリーンはいなかった。

「アイリーン？　どこにいるんだい？　忙しいなら自分でやるよ。」

洗剤はどこにあるんだい？」

しかし、アイリーンはそれには答えなかった。そして俺は庭に出た。

「アイリーン、洗剤……」

キミは、庭にうつぶせになって倒れていた。俺は急いで、救急車を呼び、小さなシルビアを連れて、一緒にその救急車に乗った。

キミの症状は急性心不全だった。もともと心臓に小さな穴が開いていて、不整脈があつたらしい。俺はドクターをお願いをして、彼女を清潔な個室にかえてもらった。

2日後に彼女は意識を取り戻し、俺は彼女と話しをした。

「アイリーン、心配したぞ。でも良かった。無事、意識が戻って」「マスター、店は？」

「店なんて…、休みにしたよ。こんなときに開けるわけにはいかないだらう」

「そんなの、ダメよ。それじゃあ常連さんたちがかわいそうじゃないの。毎晩あのバーでお酒を一杯飲むのを楽しみに来てる人たちだっているのよ」

「ああ、いいんだ。2日ぐらい休んだって、そのぐらいどうつてことない。それよりもキミの身が俺には大事だ。アイリーン、聞いてくれ。この2日間俺は考えたんだ。俺にとってキミはかけがえのない女性だつてことを…。アイリーン、俺はキミのことを…愛している」

「マスター…」

「だから、俺と結婚してくれないか？」

「でも私には子供がいるのよ、シルビアが。それでもいいの？ それに、持病もちよ。それも心臓の。そんな私でもいいの？」

「ああ、いいんだ。シルビアはとってもいい子だよ。俺もあの子が自分の子になってくれればいいと思っていたんだ。それに、キミがない人生なんて意味がない。心からキミを愛してる。だから俺と結婚してくれ！ アイリーン」

それから俺たちは結婚をした。式は近くのプロテスタントの教会で。そしてウェディング・パーティーはこのアイリーンズ・バ

ーで盛大に行った。それからの日々は二人にとってとても幸せな日々が続いた。

しかし、そんな幸せもあっという間に過ぎていってしまった。

2年後の冬の寒い朝だった。キミはインフルエンザにかかって、高熱を出したんだ。普通ならインフルエンザはそれほど怖い病気ではないけれど、心臓に持病を持ったキミにとってそれは致命的な病だった…。

そして、キミとの最期の晩にキミは俺とキミの娘のシルビアを呼んだ。

「ねえ、二人ともこれから話すことをよく聞いてね。この2年間、いいえ、あなたと会ってから私はとっても幸せだったわ。それは、これまでの私とシルビアの人生の中でも最も充実していたわ。第三者から見れば、決して長い幸せではなかったかもしれない。でもね、私は満足しているの。そして二人には感謝してるわ。シルビー、あなたが私の娘でいてくれて本当に良かったって…。いつだって私はあなたを愛していたのよ。これからは私の代わりにケイの面倒を見てあげてね。そしてケイ、まだまだシルビアには助けが必要よ。あなたには負担になってしまっけれど、シルビアがいつか好きな人が現れて幸せになる日まで見守ってあげて。これがわたしからの最後のお願ひ」

「やめてよ、ママ。まるでこれじゃあ、ママが死んじゃうみたいじゃない」

「そうだよ。アイリーン。最後のお願ひなんて…」

「人間って、不思議ね。始まりはよく覚えていないのに。終わりが近づいているときはなんとなくわかるみたいなの。でもその方がいいわ。だってさよならの言葉を言えるでしょ。それにそれ以上に感謝の言葉を言えるでしょ。でもね、実は私は、人の魂ってなくならないって思っているの。私ね、会ってきたのよ。私のママやおばあちゃんにね」

「アイリーン、何をいってるんだい？」

「信じてもらえるかどうかわからないけれど、…前に私が庭で倒れたときがあつたでしょ？」

「ええ、あれは2年前のことよね？　それがきっかけでママとマスターは結婚したんだよね」

「ええ、そうよ。そのときにね。私、2日間ぐらい意識がなかったでしょ？」

「ああ。たしかにキミは2日の間、病院のベッドで点滴を受けながら意識を失っていたよ。あの時はそれこそ…」

「あの時、私には意識があつたのよ。もっともこっちの世界でのことではないんだけど。そこではね、たくさんの人々が生活していたわ。そして私は、草原をしばらく歩いてある町に着いたの。そこでね、わたしはわたしのママとおばあちゃんに会つたのよ。二人は前のようによく話してはぶつかつていたわ。でも二人とも私と会えてとつても喜んでくれたのよ。そしてしばらく一緒に過ごしたの。向こうの世界では一週間もいたかしら…とてもその間は楽しかつたわ。でもそのうちに二人はわたしにこう言ったの。『さあ、そろそろアナタの住む世界に戻る頃よ』って。『ここにはいずれまた、来ることができるようでしょう』ってね。私も本当にそんな気がしたわ。でも、それがいつになるのかずつとわからなかつた。けれど、今はもうわかるわ。それとね、その体験をしてからね、私は死ぬことは怖くなくなったの。きつと死ぬとそこに行けるって今は信じてるから。けれど、あなたたち二人とお別れをする悲しさまではやっぱり消えないみたい…」

すると、キミの両目から涙があふれて頬にこぼれていった。

「シルビィー、私はいつだってこれからもあなたを見守っているわ。だからね、あなたは自分のやりたいことに進みなさい。夢を持って生きるのよ。そして、きつと幸せをつかんでね。…ママみたくね」
そしてキミは苦しそうに咳き込みはじめた。

「ええ、ママ、わかったわ。でもママ、死んじゃダメだよ。まだまだ私にはママが必要だよ。だから死なないでよ。ママ。お願いよ……」
「そうだよ、アイリーン頼むよ。俺だってお前がまだまだ必要だ」
「ごめんなさい……。二人とも、もっと強くなつて……。人はいつか……必ず別れるときが来るものよ。いつかは……その日がやって来るの。それがいつ訪れるのか、それは誰にもわからないわ。だから……後悔しないように……毎日を大切に生きてね。そして……自分の幸せだけじゃなくて周りの人にも幸せを……分けてあげて。あれをしておけばよかった。こうすればよかったって、後悔しながら過ごしてはだめ……よ。だつて……しないで……後悔するより……して後悔するほうが……ずっといいでしょ？ なんでも……試してみなくっちゃ、人生……おもしろくないわよ。だから……自分を信じてあげて。がんばるの。……シルビー、いつかまた……きつと……会えるときが……くるわ。その日を……楽しみに、してるわ。そのとき……ま……で、元気でね……。……二人とも……愛してる……わ……」

それからキミは穏やかな顔で最後の息をしたんだつた。

「マ、ママ！？ いやよ。ママ、起きてよ。お願いよ、ママ、目を開けてよ。ママ……ッ！」
「アイリーン……」

キミが亡くなつて、数日後にキミの遺品を整理していたら、ある封筒が見つかったんだ。それはキミから僕宛のものだった。そこには手紙と一緒に1冊の銀行の通帳が入っていた。その通帳の名義はシルビアで、毎月300ドルずつ、積み立てがされていた。キミの儉約はそのためだったんだね。キミの手紙どおり僕はまだこの通帳を大事にしまつてある。けれど、そろそろこれをシルビアに渡す時期なんじゃあないか……最近思うんだけど……キミは賛成してくれるかい、アイリーン？

今、俺の目の前では、枯木が赤々と燃えていた。隣ではケイトが横になっていて。彼女はここは現実世界とは違うドリームランドだという。はたして本当だろうか？ 今までヒロシと旅をしてきてちよつと変わった村とかなら行ったことはあった。けれども現実世界ではないなんて話、まともに信じて言うのがそもそも無理な話だ。だから、俺はさつきから、現実世界とこの「ドリームランド」との違いを探そうとあたりに目を配った。しかしその違いをはつきりと見つけることはできなかった。ただ、空の色がなんとなくぼんやりとしているような気がした。ぼんやりと明るい。けれど曇っているようではない。しかし陽を見ることができなかった。そして周囲がだんだんと薄紫色に包まれて暗くなっていった。そして空を見上げると、無数の星が見えた。それでなんとなく安心した。もしここが現実世界じゃないとしてもかなり現実に近い世界なんじゃないかって思えてきたからだ。それに、まわりにある植物も安心感を与えてくれた。

「ここが砂漠じゃなくて、よかった」

俺は独り言を言った。

「それにしてもヒロシは今ごろどうしてるんだろな…」

けれども、俺にはここにきてからずっとヒロシの気配を感じている。だからヒロシはきっとここからそう離れていない場所にいるような気がしている。なぜだかわからないけれど…。

そんなことを考えているうちに、俺は少し眠ってしまったようだ。しまった！ 枯枝をたさないと。しかし、不思議なことに、先ほどから焚火の変化はなかった。

「一体どういうことなんだ？」

俺にはその理由はわからなかった。それと、今になってあらためて気付いたことだが、焚火は、火のそばとこの場所とで温かさがほとんど変わらなく感じる。これも不思議なことだった。普通なら近ければ近いほど熱く感じるはずなのに…。

「やっぱり現実世界とここでは違うようだな」

すると、焚火の向こう側で、

「フフフツ」と笑い声がした気がした。

「誰だ。そこにいるのは？」

「フフフツ」

それはまた笑った。ケイトは俺の隣にいる。一体誰なんだ？

「アレツ？ もう私のこと忘れちゃったの、カズは」

まさか…でも俺をカズなんて呼ぶのは…。

「ひよつとして、ナルア、キミかい？」

俺は半信半疑で尋ねた。

「そうよ。覚えててくれたのね。お久しぶり、カズ。あんたもやろうと思えばちゃんと火を点けられたじゃないの」

そういうとナルアが静かにこっちへやってきた。

「ああ、なんとかね。っていうか、ナルア、たしかお前交通事故で亡くなったって…」

「…ええ。そうよ、カズのいうとおりよ」

なに…?? ってことは…ここは一体…。はっきりいって俺の考えの限界を超えてる。いったいどういう世界なんだ、ここは。

「カズ、あんた人の話ちゃんときいてる？」

「あ、ああ。きいてるさ、ちゃんとね」

「カズ、どうしたの。顔が青ざめてるよ。まるで死人みたいよ。アハハ」

「死人だって!? ナルアこそトラックにはねられて死んだんじゃ

…」

「まあ!? なんてぶしつけなものいいなの。もうちょっと亡くな

つた人をいたわるような言葉かけられないの！」

「ごめんよ。そんなによくしゃべる死人となんて今まで出会ったことがないもんでね」

「まあ、ちよつと見ない間に生意気な口きくようになったわね。死人が話して何が悪いっていうのよ！」

「あのなあ…、昔から死人に口なしっていうだろ」

「そういえばそうね…。あたし話してるわ！　じゃ、死んでないのかしら？」

「ストップ。俺に聞くなよ。頭が変になる。けど…」

「けど、なに？」

「また会えてうれしいよ、ナルア」

「…本当に？」

「ああ」

「そう。それなら、よかつた…」

「でもなんでお前こんなところにいるんだ？」

「さあ、あたしにもわからないんだ。気付いたら、この世界にいたんだもん」

「そうなんだ」

「うん…ところで、カズこそなんでこんなところにいるのよ？」

俺はどういう理由でここに来たかをナルアに話した。

「昔っからカズって女には弱いからな。だったら、今がチャンスなんじゃないの。逃げるには？」

「確かにな…。でもやっぱりそれはできない。」

「どうして？　このままあの女と一緒に行動していたら記憶を消されちゃうんでしょ？　それでいいの、カズは？　この世界のことなどみんな忘れちゃうのよ。あたしとここでこうして会ったこともよ。それでもいいっていうの？」

「それは…仕方ないじゃないか。今ここで、彼女を一人で残したら、きつとあの化け物に襲われてしまう。だから彼女を見捨ててここを去るわけにはいかない」

「カズ…、あんた私の知らないうちに…」
「知らないうちに、なんだよ」
「あつ!? もしかして、その女に惚れたんじゃないの」
「な、何いきなり…何いつてんだよ、俺は捕虜も同然なんだぞ!」
「捕虜だつて人を愛せるわよ。どうなの? やっぱ惚れたの?」
そのとき、気のせいかもしれないが、ケイトが動いたように感じた。
「アハハハハ、そうなんだ、惚れたんだ。やっぱり」
「こつこのヤロー、そんなに人をからかって面白いか」
「うん。おもしろい! とくにカズをからかうのは最高。死んじやつてからさ、今までで…一番楽しいわ…」
「…それよりもナルア。ここは本当にドリームランドってところなのか?」
「え!?! そうね、そうみたい。」
「ここには、ナルアみたく、その…つまり亡くなった人もたくさんいるのかい?」
「さあ、それは、よくはわからないな」
「じゃあ、この世界のことでは何か知ってること教えてくれないか?」
「あたしが知ってることなんて大したことじゃないけど、いいわ。教えてあげるわ」
それから、ナルアは俺にこの世界について知っていることをいろいろと教えてくれた。

S・13 フィッシャーマンズ・ワーフのバー

カウンター内のバーテンはさつきから忙しそうに、オーダーされた飲み物を次々と作り続けていた。俺は八セの故郷のビールのスタイン・ラガーと「ブルームーン」というこの国のビールだがベルギータイプのビールとクアーズ、そしてコーラのライム添えをそのバーテンに注文した。忙しそうだったが、快くひきうけてくれた。間もなくして、オーダーした飲み物が俺たちのテーブルに届いた。

さて、バー内のスクリーンを見てみると試合はどうやら地元ของทีมがやや負けているようだった。そしてついに残り3分になったときにチームのポイントゲッターらしき選手が相手の強烈なタックルで負傷してしまった。

それまでに俺たちは、飲み物をもう一杯追加していた。さて、その代わりに出てきたのは補欠の選手だった。この時点で、その試合はそのチームと店内の応援団たちにとってほぼ絶望的ということが、周りに漂う雰囲気伝わってきた。俺たちは、自分たちの話をやめ、残りわずかなその試合をそのスクリーンで観戦した。

しかし、試合はその店内の観客の予想に反して見事に優勝してしまった。それは補欠として出てきた選手のみごとな活躍だった。残り時間を1分きつてから、彼にボールが渡った。相手チームも補欠選手とたかをくくっていたらしく完全にノーチェックだった。そして彼が全身の力で思いつきりボールを前に投げた。長ロングパスだった。それがとおって、タッチダウン。この時点で逆転。その後も試合は十数秒続いたが、間もなくホイッスルが鳴った。こういう展開というのは、この国の人々にとってはたまらないらしく、そのときの歓声はまるでベルリンの壁を壊したときのドイツ人たちの歓声に匹敵するかと思えるほどの大きさだった。

そのいくさ後のバーに俺たちはまだいつづけた。人々は試合後に、一人、二人と姿を消していった。しかしその前に、そこにいた全員に、マスターから全員にビールが一杯ずつ勝利の杯として配られた。もちろんその恩恵は俺たちのテーブルも例外なく受けられた。ビールはバドワイザーで、客から客の手に渡され運ばれてきた。ちなみにリヨウは未成年ということ、またしてもコーラになった。ワンプイントのビールに30分以上はかけて飲むというまるでチェコ人のような飲み方を俺たちはしていたので、結果的には数杯しか飲んではいなかったのだが、この最後の一杯は計算外だった。しかし、この一杯だけは絶対に残したくはないと思ったのは皆同じだった。だから、さらに時間をかけてその一杯をゆっくり時間をかけてついに飲み干した。バーに入る前に東の空にあった満月は、出たときには、真上にあり、夜空を青く照らしていた。そして俺たちは今晚泊まるモーテルへと歩いていった。

S・14 カールの話

ベルナーの奇妙な塔のような仮屋敷の裏手には馬小屋があり、その馬番をしているカールは、日本の大昔の建物やニューギニアのマオリ族の集落で見かけるような高床の小屋に住んでいた。入り口は、地面から直接、床にはしごを架け、床を開けて入るような造りになっていた。窓は2箇所だけあった。

「誰か、来たようだ」とカールがコロに話す。

「この臭いはヒロシだ。僕の友達だから、安心して」
床のカーペットにあぐらを組んでいたカールはすばやく起き上がる
と前方の床を不意に開けた。

「ようこそ、ヒロシ。さあ中に入りたまえ」

そういうと、ヒロシの右腕をがっしりと掴んで中へと引っ張りあげた。

「あなたが…」

「カールだ。よろしく」彼は軽くお辞儀をした。

「こちらこそ」

「コロを迎えに来たんだね」

「ええ。それと聞きたいことがあります」

「この私に？ 何かね？」

「ビーストについてです」

「それはたんなる興味本位かい？」

「いいえ。明日この村を出発して、ある泉に向かいます。だから、その危険なビーストがどういうものなのか、可能な限り知っておきたいんです」

「そうか…。ま、いいだろう。しかし、これから馬小屋の見回りに行く時間なんだ」

「それなら、一緒について行きます。だからその間に教えてもらえませんか？」

ヒロシはビーストの正体を知るまでは、カールから離れるつもりはないようだった。

「わかった。では一緒について来るがいい」

馬小屋はいたって普通のニュージールランドやイングランドにある、木造の小屋だった。カールは馬の飲み水の残量を確認した。足りないところはその近くの井戸まで行き、井戸の水をバケツに入れ替え、また馬小屋に戻りそこへ、補った。

そのこぼれた水をコロが飲んだ。

「冷たくておいしい水だよ」

「だろう。やや硬水だが、この世界にもうまい水があるもんだろ」

「そういえば、カールさんやベルナーさんはもうどのぐらいこの世界には来てるんですか？」

「俺はかれこれもう2年ぐらいになるよ。ベルナーはもっと以前からこの世界にきているようだ」

「なぜ、ここで馬番なんか…」

「それは、憧れだったんだ。現実世界では、俺はしがない小さな町の中古車のディーラーでね」

「馬番が憧れ？」

「ああ、こういう自然と共に暮らしていくのが夢だったんだ」

するとカールはバケツの水を足元の水桶に流しこんだ。

「でも、不便じゃありませんか？ 水を飲むのもわざわざ井戸から汲まなければならぬのに…」

するとカールはゆっくりと次のことを語った。

現実の世界は確かに便利で快適かもしれない。しかし、便利すぎると人間っていうのはついつい墮落してしまうものだ。そして、薄情にもなっていく…。それは不幸なことだと、この世界で暮らして気づいたんだ。

しかし、現実の世界ではそう簡単に自分の生活を変えられるものじゃない。だからまずここで試そうと考えたのさ。ここで、自信がついたら、俺は、現実の世界でもこんな暮らしをしようと考えている。人間は生き物だからね、自然と共に歩んでいかなくちやいけない。コンクリートの世界で行き続けられる程まだ人間は進化を遂げてはいないんじゃないかと俺は思う。便利すぎる世界に浸かっていると、ついつい人は自然を忘れてしまう。

例えば、水を飲みたいとき、文明社会では蛇口のレバーを上げたり、手を差し出すと水は出てくる。それが常識になると、水が出ないと、それは、そこを管理しているものの責任となり、非難をする。しかし、井戸で水が出なかつたらどうだろう？ 誰を責める？ 誰を責めても仕方がない。そこに水がないから出ない。ただそれだけのことだ。水は空から降り、やがて地面にしみこみ、長い年月をかけて澄んだきれいな地下水となる。その行程は自然が支配

している。生き物は皆その恩恵を受けている。

「もしも、あまり水がない井戸だったらどうする？ そこらじゅうキミは井戸を掘り続けるかい？ けれど、地球上にある水は常に同じ量しかないんだ。無理やりに増やそうとすればどこかでそのひずみが反動となり、いつか災いとなって我々に帰ってくる。だから水がなければうまく節約して使わなければだめだ。無くなってからは、いくら叫んでも、水は増えてはこない。だから普段から無駄をせずに大事に使っていくしかないんだ。」

『大事に使う』という気持ちが感謝の気持ちになり、やがて自然への尊敬の念を生む。そして自然や神に感謝をする。大地とじかに触れて生きていけば自然とこつした気持ちが生まれてくる。だから農耕社会には昔から祭りがあるのだろう。自然を忘れると、生き物は生きてはいけない。そして自然を決して買い被ってはいけない。それはいつか滅びへの道へと続いていく……

「おっと、だいぶ余計なことを話してしまったね。キミはビーストについて知りたがっていたんだっただな」

「ええ、教えていただけますか？」

「わかった。キミはどうしてもその化け物について知りたいようだから、俺が知っている全てを話そう。しかし、約束をしてくれ。この話をし終わった後でも、今と同じように、接してくれないか」

「それは、どういうことですか？」

「つまり…俺を変人に思わないで欲しい。約束してもらえるか？」

「ええ」

「本当だな、本当に…俺をきちがいとは思わないでくれよ」

すると、カールは真剣な面持ちで言葉を慎重に選びながら、そのビーストという異形の生き物について、また、その生態について、

ゆっくりと思い出しては語ってくれた。その話は時々太古にまで遡り、この世界の創造のときまで戻ったかと思うと、どのように獲物を捕獲して、食すのか、まるで目の前であたかも見ているかのようにリアルに語った。その話をしていくときのカールの表情は、まるで何かにとり憑かれたかのような正気を失ったような声で、いや、全くの別の人格が宿ったかのような声と態度で、語り続けた。彼が、前もってヒロシに自分のことをきちがいと思わないで欲しいと頼んでいた理由がこのときになってヒロシには理解ができた。そして最後にこのピーストを操っているものが「この世界」を創造したのだと言い切った。それは、ヒロシたちが知っている神とは全く別の、恐ろしい力と知恵を持った異形の神々だと話した。それは人間なんかが太刀打ちできない非常なまでの冷酷なそして、絶対的な力を持った時間をも超えた存在だという。

ここまで話されれば、普通の人ならやはり彼を奇人として見てしまいかもしれない。しかしその時のヒロシの反応はというと、一言も口をきかずに黙って最後までカールの話を聞いていただけだった。話を最後まで聞いた後にヒロシたちはベルナーのいる館に戻っていった。

「ヒロシ、あのカールってやっぱり…その、ちょっとおかしいよ」
ヒロシの横を歩いてきたコロが言った。

「コロ、俺たち人間はまだ、地球に誕生してから300万年もたっていないらしいんだ。そして、地球は45億年、宇宙は60億年の歴史があるっていう者がいる。人間はこの100年足らずで急激な文明を築き上げてきたけれど、まだまだ、世界には知らないことがたくさんある。それに昔得たことで失った知識もかなりあるようなんだ。カールがさっき話したことだけれど、その話はまんざらうそではないと俺は思う。この『ドリームランド』はおそらくそのピーストを操るある『生き物』によって創られた世界なのだろう…。そ

して俺はそのある『生き物』について、たぶん、おそらく、知っている……」

ヒロシは表情を変えずにコロに話した。

S・15 『白鹿亭』の客人たち S・16 バーの帰り道

S・15 『白鹿亭』の客人たち

最初の門の村のメイン・ストリートにある『白鹿亭』は入り口こそ狭かったが、奥行きはかなりあった。その一番奥の部屋は、赤い絨毯が敷き詰めてあり、重圧な長テーブルに純白なテーブルクロスが13人分の席に用意されていた。扉は1つだけあり、窓は全く無かった。その代わりに窓のような額縁で、遠近法を使った花や海などの景色が鮮やかな色で描かれた絵が壁にかけられていた。また、ドアノブはいかにも鹿の角のようなデザインが施されていた。そのノブが今、カチャッと音をたてて動き静かにドアが開いた。

「どうぞ、こちらへ。ケイン様。お食事はすぐにお出ししましょうか？」

このドアを開けた店の主人らしきものが、ダブルのスーツを着たオールバックの金髪の黒いサングラスをかけた男にやや小声で声をかけた。

「いや、まずは、ワインと水と食前酒を用意してくれ」

「はい、かしこまりました」

その店の男は一瞬、やれやれという表情をしたかと思うとすぐにきびすを返しそのドアから出て行った。彼もまたこの仕事に憧れを抱いてここで働いているのだろうか？ ヒロシならそういう疑問を感じたかもしれない。

間もなくすると、ワインとビンに入れた水がテーブルの中央の3箇所にそれぞれ1本ずつ用意された。

「マスター、今日、このレストランは貸切でしたな」

「ええ、そうです」

「では、すまないが、表に誰か立たせて客人が一人でも来たら、教えていただきたい」

「わかりました。すぐに手配させましょう」
一礼をするとすぐにこの部屋から先ほどの男は出ていった。

間もなくすると、ケインに呼ばれた者たちが、二人ずつ、一人の案内係らしき女性たちを先頭にして入ってきた。

「はるばるよくおこしになりました。さあこちらへ、お座りください。まずは食前酒をお受け取りください…」

「さて、今回皆さんに集まっていたいたのは、なかなか現実の世界では信用してもらえない、例のサプリメントとこの世界についての紹介と、現実世界では、これ以上便利で安心な対談ができる場所はないということを知っていただきたかったからです」
ケインは淡々と話し始めた。現実世界では、盗聴やスパイ、また、対談するにも費用もかかれば、場所もセキュリティを確保できる場所を探さなければならないが、この世界には現実世界から何も持ち込むことができないこと。また、サプリメントを飲めば、わずか、数十分で、現実では遠い距離にいる二人が会うことができることを説明した。

「このサプリメントをぜひ、公的に認可していただきたい。また認可していただけるのであれば、皆様方には無料で毎月このサプリメントをお届けしましょう。これはまさに夢のサプリメントなのです。いかがでしょうか」

すると招待された中の一人が、

「しかし、まだ、私には理解できません。これが夢の世界だということや、そこに何度も来ることができ、ここにいる者たちが皆同じ夢の中にいるなんて…」

「正確に言いますと、ここは夢の世界ではないのです。別の次元の世界と言ったほうがいいでしょう。だから、実際に存在する我々の世界の近くにあるアナザーワールドと言ったほうがいいでしょう」

「それを信じると、我々にキミは…」

「では、ごうしまししょう。今から行くことが、目が覚めてもあつた

のなら信じていたきたい」

「なんだね、一体我々に何をしようって言うんだね」

「ちよつと照明を暗くさせてもらいますよ。なに、大したことはありませんから…」

そういうと、ケインは何かを言葉にしたがその言葉はそこにいる誰にも理解できない不思議な言葉だった。

すると、低いおぞましい声がドアの向こうから徐々に近づいて聞こえてきた。

「この鳴き声は、一体なんなんだ…」

「何が始まるんだ…」

そこに訪れた者たちのなかで、最後に言ったものの言葉が最後まで言い終わらないうちにその言葉は、ある生き物の鳴き声によって消されてしまった。そしてその窓の無い部屋の扉のノブが今ゆっくりと下に下がっていった。その後はそこにいた人々の凶器に満ちた悲鳴がしばらく続いた、ただ一人ケインを除いて…。

S・16 バーの帰り道

フィッツシャーマンス・ワーフのバーを出ると、

「あー、もう今夜は最高ね。私なんだかちよつと酔っ払っちゃったわ。ねえ、ヒロシ、あのブルー・ムーンっていうビールいいわね。また今度あったら頼もうかな」

首筋から頬にかけてほんのりとピンクに染まったクルミが話しかけてきた。その時、今のセリフを俺はずっと前にも聴いたことがあるような気がした。もちろん、それはクルミと出会うずっと前のはずだ。一体誰の言葉だったのだろうか？ それは懐かしくて、なんだかせつない言葉だった。しかし、そのときは、誰の言葉だったのか思い出すことはできなかつた。けれどもその言葉を口にした人物が誰なのか、その答えは、翌日の夜に、思い出すことになった。そう、次の町 フォッグストーンで…。

「リヨウ、しっかりしなさいよ」

そういうとクルミはリヨウの両肩を揺らした。

「おいらもう眠いよ…」

リヨウが眠りかけながら言った。

「クルミ、いつものようにリヨウを頼む」

そして、俺はリヨウを担いで、クルミと一緒に彼女の部屋に入った。ハセはドアの前で待っていた。俺はリヨウをベッドに横に寝かせた。後は私に任せて」

「ああ、リヨウをよろしく頼むよ。クルミ」

「わかったわ。おやすみなさい、ヒロシ、ハセ」

「おやすみ」とハセと二人で言った。

「さあ、ハセ、俺たちもそろそろ寝るとしよう」

「ああ、そうだな。 っと、思い出した！ 水と地図を買わないといけないかったんだっけ」

「地図なんてなくても、問題ないだろ」

「ああ、ヒロシがいればね。けれど俺も覚えておきたいんだよ。どこら辺を走っているのかをさ。だから、ちょっと通りの向こうのドラッグ・ストアに買いに行ってくる。ヒロシは先に寝てて、かまわないぜ」

「了解」

すると、ハセはモーターを背に通りのほうへ歩き始めた。

「ハセ、これ受け取れ」

俺は部屋のカードキーをハセに投げ渡した。

「サンキュー」

「ハセ、足元よろけてるぞ。大丈夫か？」

「なに、これくらいへっちゃらさ。この通りの向こうのドラッグ・ストアまでだし」

「そうか…けれど気をつけるよ」

俺はそう言ってから、クルミの部屋の2つ隣の自分たちの部屋のド

アの前まで行った。そこで、なぜか無意識にもう一度ハセの姿を目で追った。

その時、ハセは、道の反対側にあるその大きなドラッグ・ストアに向かつて通りを渡り始めていた。そこに今、左側からすごい勢いで、1台の車がハセに向かつて走ってきているのが見えた。いつもなら、彼はそれに気づいただろうが、酔っ払っていて反応が鈍いようだった。

「ハセ！ 車だ！ よける！！」

俺は精一杯叫んだ。しかし、今晚のハセはいつもよりも酔っっていて車にも俺の声にも気づかないようだった。俺はハセに向かつて全速でかけた。した。

でもなぜか次の瞬間。俺はハセの真後ろにいた。そして、彼を背中から突き倒した。それが、精一杯だった。そして俺はよけきれなかった。バン！ と鈍い音がして俺の体は宙に舞った。そして地面に額を強く叩きつけられた。

その車は前方30mほど先で止まった。中から若い男女が出てきた。そして俺のほうに向かつてきた。

「だから、運転中にキスなんてするのは嫌だったんだよ！ 見ろ、人を轢いちまった。どうすんだよ！」

ドライバーらしい男が言った。

「死んじゃったのかしら？」

その連れの女が言った。

「ああ…真正面でぶつかったんだぜ。これで生きてたら奇跡だ」

「どうするの、あんた」

「そうだな、とりあえず、死体をトランクに詰め込もう。それから後のことはまた車の中で考えようぜ。お前も運ぶの手伝えよ」

「え？ あたしも運ぶの？」

「誰のせいでコイツをひき殺すことになったんだよ」

「わかったわよ。うわぁ…それにしてもすごい血の流れようだわ…」
そういうと彼らが死体となった俺の体を運ぼうと持ち上げた。

…^UJUFU四話1

S・17 事故の翌朝…

S・17 事故の翌朝…

翌朝、つまり今朝はさすがに遅くにおきることになってしまった。
ドンドンとドアをたたく音で俺は目が覚めた。

「誰だい？」

俺はたずねた。

「ヒロシのあにい、リヨウだよ。おはよー。もう、起きようよ。天気もすごーくいいよ」

ドアの外で元気な声でリヨウが言った。

「ねえ、ここ開けてよ」

「了解」

俺がドアを開けると、目の前にリヨウがいた。

「おはよー。ヒロシ。もう体は大丈夫？ タベあれからハセには気づかれなかった？」

リヨウが俺の耳元でささやいた。

「ああ、ヤツなら夕べはかなり酔っていたみたいだからな」
俺も小声で話した。

「そう。良かったー」

「良くない。俺を飛ばしただろ？」

「…ごめん」

「なんで、俺じゃなくて、ハセを飛ばさなかったんだ」

「一瞬のことだったからだよ。あの距離のものと、正確さがかかるんだよ。どこに飛ばしちゃうか…または飛ばせなかったかもしれなかったから…」

「で、リヨウと俺の距離なら確実に、俺を飛ばせる自信があったっ
ていうわけだ」

「うん。それにさ、ヒロシなら万が一、車にぶつかっても、…死な

ないから」

「…まあ、な。けれど、すっげー痛かったぞ！」

「…ごめんなさい」

「…ま、いいさ。俺はこのとおりピンピンしてるからもつ気にすんな。リヨウ」

「ほんとに？」

「ああ、大丈夫さ、見てみるよ。かすり傷ひとつついてないだろ。」

「ほんとだ、やっぱりヒロシの体ってすごいんだ。ところで、ハセは？」

「あいかわらず、いつもと変わりなく…さ」

「まだ寝てるんだ。あいかわらずねぼすけだよな」

「ああ」

すると、リヨウが俺たちの部屋の中に入ってきた。

4人のときはいつもそうだが、ハセと俺で一部屋、リヨウはクルミと一緒に部屋に泊まる。男の大人にはない、13才の特権ってやつだ。クルミがいないときはジャンケンで負けたものが、簡易ベッドかソファに寝る。

リヨウが部屋に入るとカーテンを見つめた。するとカーテンはさーっとひとりでに両側に開いた。

「うつつ…まぶしい、誰だよ、ヒロシか、頼むからもう少しねかせてくれー」

ベッドの中でハセが呻いた。

「おいらだよー。もう朝だよー。起きようよー。朝食食べに行こうよー」とリヨウはハセのベッドの上に乗っかって、飛び跳ねながら言った。

「俺は今はパス。ヒロシ、リヨウと一緒に行ってくれないか？」

ハセはそう言うとしーツを頭にかぶせてしまった。

「ところで、クルミは、昨夜のことは？」

俺がリヨウにたずねると、

「クルミちゃんなら、その後、すぐにシャワーを使いたしたから、たぶん事故のことには気づいてないはずだよ」

「リヨウ、お前、クルミのシャワー中に覗いたりなんかしてないだろうな」

と冗談でたずねると、

「何で覗かなきゃならないのさ？ それにさあのあとすぐにクルミちゃんが一緒に体洗いっこしましょって呼んでくれたんだ。だから覗く時間なんてないもんね」

「ってことはなにか、俺を車の正面に飛ばして轢き殺させておいて…リヨウお前は、その直後にあのナイス・バディーなクルミと一緒にシャワー使ったって言うのか!？」

「うん」

「くーっ。リヨウお前ってやつはー、ちょっとこっちにこい！ その時のこと詳しく教える！」

「やだよーっ！」
とリヨウ。

「チップやるぞ」

「ほんと？ いくら？」

「50セントだ」

「チツチツチツ、おにいさん、そんなはした金では、売れませんか。あの子はうちのナンバーワンですからねえ」

「あんな、リヨウ、お前…一体どこでそんな言葉覚えたんだ」

俺はあきれて言うと、

「ポートランドのダウンタウンでさ。よく暗くなってから、バーの付近とかの道端で大人たちがそう話してるの聞いたことがあるよ」

「いいか、よくきけよ。間違っても絶対にクルミの前ではそんなセリフ、口が裂けても言うなよ」

「なんでさ？」

「二度と一緒にシャワー入れてもらえなくてもいいのか」

「やだよーっ！ 決してクルミちゃんの前では言わないよ。おいら誓

「うよ」

「ったく…。ところで、今何時だい、リヨウ」

「もう8時だよ」

「まだ、8時かよ…。リヨウ、あと1時間寝かせてくれないか」と言つと、

「えーっ！？おいらもうお腹ぺこぺこだよ」

「クルミはまだ寝てるのか？」と聞くと、

「うづん、ちょっと人に会いに行くからって。次の町でまた会おうって言つてもう出発したよ。アッ！それでこれをヒロシに渡すように頼まれたんだっけ」

そういうとリヨウは着古したジーンズのポケットからこのモーター名が書かれた1枚のメモを差し出してきた。

グッモーニン、ガイズ。

この先のサンタクルーズの町でちょっと人に会うので、お先に出るわね。

私の部屋のチェックアウトよろしく。

特に私は何も使ってないわ。

今日の泊まる場所は、フォッグストーンだったわよね？

もし会えたら、棧橋で夕方の6時にまた会いましょう。

それと決して私の後は追わないでね。

それじゃあ、またあとで。

クルミ

「なるほどね」

さすがクルミだ。昨夜はあんなに酔っていたはずなのに…。

「ね、だから、一緒に朝食に行こうよ。遅くなるとおいしいものなくなっちゃうよ」

リヨウがせかす。

「リヨウ、もう一人でも食べにいけるだろ。悪いけれど9時まで、寝かせてくれないか。特にハセはドライバーだからさ。十分な休養が必要なんだよ」

と俺が言うと、

「チエツ、わかった。そうする。先に行って、みんなたいらげちゃうもんね」

するとリヨウはレセプションのある建物へと向かっていった。

その後、俺は一眠りした。

そして目が覚めると、時計はすでに10時を回っていた。急いでハセを起こし、レセプションに向かう途中の駐車場のハセの車の前にはリヨウがいた。その後、そのモーターの無料のコンチネンタルの朝食が用意してあるレセプションにリヨウも連れて向かったが、ときすでに遅し、すでに朝食の時間は終わっていた。けれどそのモーターの気のいいインド人のマネージャーの奥さんが、俺たちを気の毒に思ったのか、真っ赤なリングと一緒に、入れたてのコーヒをテイクアウトようにふたをして渡してくれた。朝食をしっかりと食べてきたリヨウもちゃっかりもらえた。

「よかったね」

とリヨウ。

「ああ。こういうリーズナブルなモーターにはけっこう今みたく親切な経営者が意外と多いんだ」

と俺が二人に話すと

「それと、ハイ、これも」

するとリヨウはジャケットの大きなポケットの両側から、チョコチップマフィンを出してくれた。

「さすが、それでこそ、わが弟子ルーク、フォースの良き導きのあらんことを」とハセがおだてていった。

そして、俺たちは部屋からそれぞれの荷物を車に運び込んだ。

「リヨウ、これからハセとチェック・アウトしにレセプションに行くから、いつもみたく2つの部屋のチェックしておいてくれないか？」

「O.K.」とリヨウが言って部屋に戻っていった。

俺とハセはその後すぐに先ほどのレセプションへ部屋のキーカードを返しに行った。すると、

「今日はこれからどちらへ向かうの？」と先ほどのインド人の奥さんが話しかけてきた。

「南のフォッグストンへ行くんだ」とハセが答えた。

「それなら今日みたいに天気がいい日だったらルート1を通るといいわよ。あの道はとつてもシーニックなドライブ・ルートだから。

わたしの大好きな南に向かうルートなのよ」と教えてくれた。

それから、俺たちは車に乗り込むと、エンジンをかけた。いつものようにハセの横に俺が座り、リヨウは後部座席に。そして、俺たちは、いよいよこのフィッシャーマンズ・ワーフ近くの3階建ての格安のモーターから出発した。サンタクルーズに行くにはいろいろルートがあったが、あの奥さんが言ったルート1を通ることにした。サンフランシスコは急な坂道が多かったので、それを避けて進むため、一度ゴールデンゲート近くまで行き、そこからルート1に入り、南下していった。

車のステレオスピーカーからは、かるやかな夏にふさわしいナンバーがさつきから続いて流れていた。しかし、今日はまだ気温は15度を下回っていた。片道1車線の道路の右脇には、時々忘れた頃に、この道のナンバー「1」という標識が近づいたかと思うとさーっと通り過ぎていく。この道の右にはコバルト・ブルーの海がはるか前方まで続いていた。この海には寒流が流れているため、夏でも

昨日のように時折気温は10度まで下がるときがある。だから、このエリアの町のお土産やでは一年中フリースやパーカーなどが売っていたりする。また、このエリアは海産物も豊富で、大きな頭のあるダンジネス・クラブというワタリガニの仲間がよく獲れる。また、長さが数メートルにもなる、巨大な海藻がこの周辺の断崖絶壁の海中に生えていて、それを食べるウニがいるおかげでそれを好物とするラッコがときどき海面から顔を出していた。そんな姿が、カーブ続きのこの道を走るドライバーの目をしばし癒してくれる。しかしこの道を守る者達は皆ゆつくりとドライブするのが好きな者達ばかりのようで、なんとなくお互い気が知れて、ときたま休憩に立ち寄るカフェやショップでは皆、初対面なのに気軽に挨拶をしてくれる。なかにはこの先の情報を教えてくれる旅行者らしいものたちもいた。このベイエリアと呼ばれる地域に入ってから、だんだんと親切な人たちが多くなってきたような気がする。

今日は午後の6時にフォッグストンの桟橋でクルミと会うだけだったので、時間はたっぷりあった。

「ヒロシ、昨日、町のガイドブックに書いてあったんだけど、サントクルーズの森の中に『ミステリースポット』っていう変わったところがあるんだってさ。知ってるかい？」

ハセが俺に聞いてきた。

「ああ、あそこか…懐かしいな。ちょっと変わったところなんだ。なんなら寄ってみるかい？」

と俺が言うと、

「ほんと？ ヤッター」

とハセとリヨウがハモって言った。

S・18 それぞれの夜

S・18 それぞれの夜

この世界の始まり 全ての始まりは「ビッグバン」というのが今日の物理天文学では主流のようだ。しかし、なぜ「ビッグバン」が起こったのかは、誰にもまだわからない。しかし、それを起こしたのは「大いなるもの」の意志だというものがある。その考えを唱えるもの話では、ビッグバン以前の「闇」そのものに意志があり、それが「ビッグバン」を起こしたと言うのだ。つまり、この世界の創造主だ。そのものはさらにこの世界に「霧」と「闇」と「混沌」を創り、それぞれに自分に従えるものを創ったという。その「混沌」の中から誕生したものが、この「夢の国」を創り、「大いなるもの」を守っている。そして、その「混沌」の中から生まれしものは、人間にしばしば干渉し、自ら破滅に向かうように従者を使って、影で操っているという

「まとめると、こういうことだね、ヒロシ君」白髪の混じったあごひげを右手でそぎながら、ベルナーはヒロシに言った。今、ヒロシたちはベルナーの研究室を兼ねた館の2階のリビングルームで、つまり、昨夜の夕食をとった、丸いテーブルを囲んで朝食を取っていた。

「……」

「ヒロシ？」とシルビアが彼を見ていった。

「ベルナーさんの話ちゃんと聞いている？」

「あ、ああ…聞いているよ」

「一体全体どうしちゃったってどういうの？ なんかヒロシらしくないわよ。夕べ何かあったの？ 変な夢でも見たとか…っていつてもすでにここ自体変な夢の中か」

「…シルビア、ここはただの『夢の世界』じゃないんだよ」とヒロシが言った。

「ええ、そのようね。でも、この『夢の世界』を創ったっていうのはやっぱり『神様』に違いはないんでしょ？」

「その質問には、私が説明するよ。ヒロシ君、出発までまだ少し時間があるから、向こうのソファで少し休むといい」

「ベルナーさんのお言葉に甘えてそうさせてもらいます」

「では、シルビアいいかな、これまでの研究過程で得た知識を整理して順を追って話すとしてよう」

「あおう…最初のほうはこれまでも何度か聞いているから、ちょっとはしよって説明してくれませんか？」

「お、そうだったかな？…了解。では、我々が知っている神との違いから説明するとしてよう…」

ヒロシはテーブルを後にし、ソファに身を投げ出した。すると、間もなく意識が遠のいていった…。

その9時間前。

「ね、簡単でしょ。ハセもやってみて」とナルアが俺にやらせようとしているのはつまり、火のおこし方だった。しかし、今度のやり方はちょっと変わっていた。つまり、燃やすものが全く無い状態で火をつけるんだ。しかしそんなこと物理的にも不可能なはず。なのにナルアときたらいと簡単に手のひらに小さな火をつけることができた。しかもその火に手をかざしてもさっきの焚き火同様熱くなく、ほのかに温かいだけだった…。全く俺にはわけがわからない。一体この世界はどうなってるんだ!？」

さらにその4時間前。

クルミとリヨウは17マイルズ・ドライブ内のある館を双眼鏡を

使って遠くから覗いていた。

「クルミちゃんみたいにナイスバディなお姉さんたちが水着姿でいっぱいいるねえ。」

「ちよつと、リヨウちゃん！ 今アンタ何ていったの？」

「え！？ ナイスバディって…だってヒロシの兄ィがそうクルミちゃんのこと言ってたから…」

「もうヒロシったら！ あのムツツリすけべが…」

「でも、なんでこんな時期に皆、水着姿なんだろ？ 寒くないのかな？」

「そうね…、いくらペント・ハウスだからって今の季節にはちよつとおかしいわね」

「ねえ、クルミちゃん。そのペントハウスって何？」

「そうねえ…男にとつての<天国>みたいところよ」

「ふうん。じゃあ、女にとつては？」

「バカ騒ぎしてラリっててもまともにみられるとこよ。しょうがないわね、暗くなるまで待ちましょ。」

「なんで？」

「バレないように潜入するためよ」

「じゃあさ、ホテルで先に夕飯食べようよ。おいら小腹すいてきちゃったよ」

「そうね、簡単なサパーでいいならそうしましょ。でも、またここに来るんだから、あんまり食べ過ぎないでね。」

「どうして？」

「リヨウちゃん、あんたいつもたつくさん食べるとすぐ眠くなっちゃうでしょ？」

「チエツ、せっかくフランス料理をたらふく食べられると思ったのに…」

「それは残念でした。今からだといタリア料理しか食べられないわよ」

「そうなの？ イタリア料理でもおいらいいよ。で、どういった料

理？」

「はい、本日のメイン料理はピッツアでございます」

「え！？ ピッツア…」

「そうよ、れっきとしたイタリア料理でしょ」

「昨日のランチもピッツアだったでしょ！」

「あれは、アメリカン・ピッツア。今夜はイタリアン・ピッツアよ」

一方ヒロシたちは

「ハ、ハックション！」

「お大事に、ヒロシ。夜風で風邪でもひいた？」

とコロがたずねた。

「イヤ、大丈夫。うわさでもされたかな？」

「ね、ヒロシ。あれ、シルビアじゃない？ 館の外にいるの、そう

だよね」

「ああ、そうだな。なんか変な歩き方だな…」

「ついていってみる？」

「ああ、そうしよう」

シルビアはまるで何かに誘われているかのように、ゆっくりと門に向かって歩いていった。その100メートル後方をヒロシとコロがそっそっついていく。

再びハセたちは

俺のほうはというとナルアに火のつけ方を必死に教わっているところだった。

「いい、イメージを強く持つよ。それも清い心で思い描くの。火は聖なるもの。我々になくってはならない尊いもの。そう念じて、手の平を上にかざして。邪念を払って、そして火に集中して。火は大事なものって念じて。強くよ」

すると、手のひらの上にぼんやりと光が見えてきた。

「そうよ、ハセ。いいわ、その調子」ナルアの指導の下ようやく、

俺は火を出すことに成功した。

再びベルナーの研究室。

「本当にこれがイメージなの？」シルビアがコーヒーカップを手に、ベルナーにたずねた。

「ああ、そうだよ。イメージの具現化が瞬時にこの世界では起きるんだよ」

「もつとわかりやすく言って」

「そうだねえ、シルビアは現実世界ではシンガーだったね」

「ええ、ローカル・エリアのだけれど…」

「自分の唄を何かに録音してるかい？」

「ええ、CDにしてるわ。1枚15ドルでお店で売ってるの」

「CDは、厚さ約1.2mmのポリカーボネイトの円盤状の中にある厚さ80nmのアルミニウム蒸着膜の円盤にデジタル情報を記録しているものなんだ。そこには非常に細かいくぼみが彫られていて、そのパターンによってデジタル情報を表現している。そのくぼみをピットといい、そのピットのない部分をランドといってね、ランドの部分に当たったレーザー光は反射してそのまま戻ってくるんだが、ピットがある部分に当たったレーザー光はランドからの反射波と1/2波長の位相差をもつため干渉して打ち消しあい暗くなる。この明暗によりデジタル信号を読み取り、これをアナログ信号に戻す。この一連の作業をCDプレーヤーは瞬時に行ってさまざまな音を出力する仕組みなんだ。そしてDVDはさらにそこに映像も伴う。わかるかい？」

「え、ええ。なんとなくわかったような、わからないような…」
さらにベルナーは話し続けた。

「ところで、そのコーヒーカップは実物に近い触感がある。だから、触っているように思えるんだよ。この世界は3Dのイメージの世界らしい。そして我々の頭の中には、膨大な記憶がある。これらを思

い出すのも記憶するのも、脳内では微弱な電気を発して神経細胞によつて伝達される。その微弱な電気をこの世界ではキャッチして信じられない速さの処理で具現化しているようなんだ。この『Dreamland』には我々や生きとし生けるものの意識が集まってくる。意識には記憶が伴う。というより、意識もまた微弱な電気信号で伝えることができるものなんだよ。だから、基本的には意識も記憶も脳内では同じ処理で再生されるんだ。わかるかい？」

「ええ、なんとなくね……。でも記憶は人によつて様々でしょ？　なんでこの世界が誰の目にも同じに見えるわけ？」

「それはまだ、はっきりとはわからないが、おそらく我々生命の共通の認識やこの世界を創つたものの関与から出来上がったんじゃないかと思う。『杉の木』はこんな形で幹に触るとゴツゴツしているとか、そのコーヒークップは白くて、表面は滑らかでツルツルとしているなど。これらは我々の経験による記憶から想像できる。それを意識したときに瞬時にそこに現れ、触るとその触った感触が思い出される。そして触ったときの指先の感触が神経組織によつて、脳に伝わる。その伝わったときのシグナルが、脳内で記憶されているから、触れて嫌なものには事前に触りたくないと思うんだ。だから、このコーヒークップの様相から触れるとこんな感じだということが想像できて、そのときの微弱な電気信号がこの世界では処理され、あたかも触ったかのように、さらには食べたかのように感じられる。全てが現実の世界にかなり忠実に再現されるんだ。しかし、それでも実際の世界とここでの感じ方はやはりどこか微妙に違う。だからこの場所が『Dreamland』だとわかるわけなんだが　シルビア、私の話についてきてるかね？」

「え、ええ。たぶん…ね。ところでヒロシも今のこと全て理解してるの？」

「理解どころか、この結論はさっきのヒロシの話抜きには、たどり着けなかった結論なんだよ」

再び昨夜に

「ヒロシ、このままじゃあ、シルビアは町の外に出ちゃうよ。いいの？ こんな夜に大丈夫？」コロがシルビアを心配していた。あたりは月も出ていなく、明かりと言えば家々の窓からの明かりだけだった。

「ああ。目を離さない限りはね。シルビアが一体どこに行こうとしてるのか確かめたいんだ」

「この距離ならいざとなれば、あっという間にそばまで走れるしね」「そういうこと。それに、シルビアが誰かに操られているとしたら、それが誰なのかこの目で見ておきたい」

シルビアが村の門を出て、すでに20分ほど歩いた。前方に林があった。シルビアはその中に入ってしまった。

再びクルミたち

「イタリアン・ピッツアってシンプルだけれど…」

「おいしいでしょ？」

「うん。ソーセージもサラミもチキンも上にのってないのね」

「本場のイタリアン・ピッツアってけっこうシンプルなのよ」

二人はサパーが終わると再びクルミのバイクで出発をした。

まもなくクルミのバイクは、昼間の館に着いた。

「さすがに、誰もいないね」

リヨウは周囲を見回した。するとクルミがジャケットからサングラスをとりだした。

「夜なのにサングラス？」

「リヨウちゃんのもあるわよ。かけて」

「へえ、レイ・バンド。でも、これ偽物だね」

「そうよ。でも本物よりもこちらのほうがずっと性能がいいわよ」するとリヨウもサングラスをかけた。

「へえ、すごい、これ。夜なのに明るく見えるよ」

「赤外線暗視スコープが機能しているからよ。それじゃあ、次はサ

ングラスの右のスイッチをONにしてみて」

「これのこと？ アッ！」

「赤外線だけじゃなく、可視光線以外のあらゆる光線もとらえるの」

「あの緑の光って？」

「おそらく監視用でしょうね」

その光は、ゲートから庭に玄関まで縦横無尽に動き回っていた。

「ここから入るのはネズミでも無理みたいだね」

「そのようね」

「でも南側は断崖になってるし…」

「その南側に回ってみましょう」「クルミはi・phoneをとりだした。」

「南側の断崖の下は幸いにも砂浜が少しだけれどあるわ」

「もしかして、その断崖からはい上るの？」

「まさか！？ もつと楽な方法だよ」

一方ヒロシたちは

「あの林の中に一体何があるっていうんだ」ヒロシたちは先ほどからずっとシルビアの後をつけていた。

「ヒロシ、何か危険な感じがさつきからしてきてるよ。それにかすかに匂うんだ…」コロが鼻を鳴らしていた。心配そうな表情だった。「それはなんの臭いだい？」

「今まで一度も嗅いだことがない臭いだけれど、獣のような臭いと腐臭がまざったものの臭いと妖しい甘い香りのするものがこの先にいくつかいるようだよ。正直こんな変な臭いは嗅ぎたくないよ。それにこの臭いはきつと人間には酔うかもしれない…そのうちヒロシにもわかると思うけれど…」

「そうか…ハンカチでも持ってきてくれれば良かったな…といってもここドリームランドには何も持ってきてないからな」

「そうなの？ でもさつきボクはヒロシからオール・レーズンもらったよ。それに今だってヒロシの臭いのついた布切れがヒロシのジ

ヤケットの左のポケットにあるのが匂いでわかるよ」

そう言われてヒロシはそのポケットに手を突っ込んだ。すると、たしかにそこにハンカチがあった。それどころか、ヒロシのいつものリュックをヒロシはいつの間にか右肩に背負っていた。

「どうなってるんだ？ たしか、ここに来たときは手ぶらだったはずなんだ…」

「ヒロシ、ここはドリームランドだからだよ。きっとヒロシが必要に思ったから現れたんだよ。だから、僕ともこうして会えたんじゃない？」

「必要に思ったから…そうか、ここではイメージの再現ができるんだ。だったら7つ道具もこのリュックに入っているはずだ」

「7つ道具？」

「そう、旅の必需品のことさ」

再びクルミとリョウ

クルミとリョウは今、先ほどの館の南側の断崖下の砂浜にいた。

「すごいところに建てたんだね。これじゃあ、絶対にここからじゃ上って入るなんて誰も考えないだろうな…」

「ということは、こちら側なら表からよりも警戒が甘くなってるんじゃないかしら？」

「でも、どうやってここから上まで上がっていくのさ？」

「リョウちゃん、私のバイクの左後ろのレザーバッグから1フィートぐらいのケースをとってくれない？」

「あいよ」

するとリョウはそのレザーバッグの中から言われたものを見つけた。

「見た目よりもこれちょっと重いね」

「そうかもね。人を乗せて使うものだから、頑丈じゃなくっちゃね」

「これに人が乗るの？」

「そうよ」

「こんなに小さいのに？」

「折りたたんであるからよ」

クルミはソフトケースを外して、その四角いボードの裏のストッパーを外すと、対角線に従って折れていた部分を広げた。すると大きさは2フィート四方になった。

「リヨウちゃん。私の後ろにいて」

「うん…わかったよ」

するとクルミがそのボードの側面のメイン・スイッチを入れた。そしてそのボードを手から離すと、そのボードは地面に向かって落ちていったが、地上から20cmあたりのところで止まり、浮かんた。「クルミちゃん。これ何なの？」

「リフターよ」

「リフターって？」

「ゴメンネ。リヨウちゃん。今は説明してる暇がないの…。それよりもねえ…私に抱きついて」

「えっ!？ な、なんで、急に…そんなこと、お、おいらそんなこと急に言われたって、心の準備が…」

「いいから、早く。じゃないとここに一人おいていつちゃうわよ」

「そんなのやだよ」

「じゃ、早く私に抱きついて!」

「う、うん。わかったよ。」

「リヨウちゃん、もっとよ! もっとピッタリ私の体にくっついてわかった?」

「う、うん…こっ?」

「そうよ。…アツ、そこはダメ。そこは触らないで…」

するとクルミはそのリフターにそっと乗った。そして右手に持っていたリモコンを操作するとリフターは垂直に音もなくすーっと上がっていった。

S・19 町外れの一本杉

S・19 町外れの一本杉

ヒロシは昨夜あまり寝ていなかった。そのため、ベルナーの館で、そのベルナーとシルビアと一緒に2階のダイニングで彼は朝食の途中だったが、それよりも彼には睡眠の方が必要だった。ベルナーに勧められ、ヒロシはソファに身を投げ出すとそのまま意識が遠のいていった…。

ジャクソン・ストリート。どこにでもあるような名前の通り。

この通りは町の中心から町外れまで続いている通りだった。今ではこの道の町の中心あたりではメイソン通りと名前が変わってしまった。しかし道は昔のままだった。その通りの町の外れあたりに1本の大きな杉が昔から立っていた。ここを過ぎるとかつての小さなビール瓶工場があり、その先にはまたかなり古いヴィクトリアン・スタイルの大きな屋敷跡がある。その先からは7マイルほど行かないと次の町にはたどり着かない。だから昔からよくこの町に住む大人たちは、自分たちの子供に、大きな一本杉から先には子供達だけで行っただけとはいけないと言いつ聞かせていたものだった。

しかし1973年の5月の最後の週末だけは別だった。

その日、あ的一本杉の下には、数名の少年たちが集まっていた。皆、腰のところにはシェットランド・ウールの暖かそうなタータン・チェック柄の毛布を皮ひもでくるんで固定して肩から提げていた。また肩にはそれぞれ麻でできたナップ・ザックをしょっていた。この情景をヒロシはよく覚えていた。当時彼がまだ10才の頃のことだった。彼らはヒロシの地元の遊び仲間たちだった。もちろんその中の一人はヒロシだった。

「みんなよく約束どおり集まってくれたね」

そうだったのは仲間のリーダーのエリックだった。当時彼が最年長で13才だった。

「あたりまえだ。こんな楽しいこと、やめられるわけないよ」と言ったのは8才の最年少のティモシーだった。

「ところで、今夜のことは皆なんていつてあるんだい。フランク、キミはなんていつて家から出てきたんだい」

「んーっと…」

「フランク、早く答えろよ」体格では一番大きな12才のサブリーダーのゲイルがせかした。

「んーっとね、ビリーのおじさんの小屋にみんな泊まりに…」

「そうか。で、ビリー、キミはなんて両親にいつてあるんだ？」

「俺は、フランクのおじさんの家に泊まりに行くって…」

「そうか。で、ティモシーはなんていつてたんだい？」

「ボクもビリーのおじさんの小屋に泊まりに行くって…そうちゃんと言ったよ」

「ティモシー、おじさんの小屋じゃない！ おじさんちだってあれほど言っただろ。俺のおじさんはとっくの昔に墓中だぜ。ったく、あれほど間違えるなよっていつたのに…」

ビリーが殴るふりをしてティモシーをにらんだ。

「うわあ、ゴメンよ…ビリー」

「どうするんだよ、これからやろうとしていることが親たちにバレたらただじゃすまないぜ…」

「うちはばれたら、お尻20回はたたかれるだろな…」心細げにフランクはつぶやいた。

腰に手をあてたままエリックが口を開いた。

「…まあそのぐらいならなんとかなるさ。さて、ヒロシ、キミはどうなんだい？」

「……………」

「どうしたんだ？ ヒロシ？」とゲイル。

「なんて言っ出てきたんだい」穏やかな声でエリックが聞いてきた。

「…その、実はさ、まだ……」

「まさか両親に何も話してないのか？」とまたゲイルがきいてきた。

「何にも話さないでここに来たのかい？ どうして？」

エリックがヒロシに近づいてたずねた。

「…それは」

「それはね、今は二人ともニューヨークにいるからよ」それに答えたのは、女の子の声だった。

「ゲッ!? ミーナだけ」とゲイル。

「お兄ちゃん、ママとのいいつけに背くつもり？」

「ミーナ……」

あの時のことはヒロシは今でも忘れられなかった。ヒロシは、すぐにはミーナに答えられなかった。

「それになんでみんな毛布なんて持つてるわけ？ まるで今日はどこかに泊まるみたいね」

「そ、それはだな…、ベリーのおじいさんの、いや、おじいさんの小屋にみんな泊まりに行くのさ。な、みんな？」

とゲイルが取り繕った。

「そうそう」とみんな口を合わせた。

「ふうん、ベリーのおじいさんの小屋ね。わたし、前に行ったことがあるけれど、こつちとはぜんぜん違う方向よね」

「本当はこの先に行くんでしょう？ この先だったら、そうねえ、ウォルナッツ・リバーあたりでしょ？ あそこなら魚も捕まえられるし、数フィートの草むらが広がっているから、秘密の基地でも作るにはもってこいだもんね」

「ヒロシ、お前ミーナに話しちゃったのか？」とゲイル。

「アッハハ、やっぱりね、そんなことだと思っただわ」

「まさかつけられてたとはな……」

ミーナは何につけてもできのいい妹だった。

「降参だよ、ミーナ。キミにはかなわない…」とエリックが言った。「みんなミーナには本当のことを話そう。実はそうなんだ。この先のウォルナツ・リバーの川岸の草むらに基地を先週作っただ。そこに泊まるんだ、今夜」

「まあ、本当に作っていたのね！ 楽しそう。いいなあ。でもあなたたちだけでは危険よ。だってみんなだつて言われてるんでしょ？ この一本杉の先からは大人がいなきや行ったらいけないって…。ティモシー、ベリー、フランクあなたたちのお母さんもそう言うてるんじゃない？」

「ミーナ、おれはもう12才だぜ。それにエリックはすでに13才なんだぜ」

まるで親たちの監視役のようなミーナに対し、ゲイルは鼻息を荒くして言った。

「そうよね。あなたたちは立派な子供たちだわ。で、本当に行く気なの？ それにあの例の2つの建物の前を無事に抜けていけるって思ってるわけ？」

「ああ、あのうわさのことが…」エリックはため息をもらした。

当時は、この町にはいろいろな噂が流れていた。その中でもこの町にはく七不思議>というのがあって、その頃、この町の子どもの間ではその噂話を怖いくせによく話していた。深夜のベビーカーの進む音、幽霊列車の話とか…。そしてこの一本杉の先には2つの不思議があった。旧ビール瓶工場にはカラスも鳴き始める夕方暗くなる頃になると、その工場内からミイラ男が現れ、子供に襲いかかり、その子供の皮膚をはいで自分の肌にしよつとすると話と、また古いヴィクトリアン式の屋敷のほうにはじつは恐ろしい魔女がひそかに住んでいて、親のいいつけにそむくような子供をさらっては魔法でネズミにして、自分の飼っている黒猫のえさにしてしまつといふ噂だった。

「そうだな、たしかにあの2つの建物の前を通っていかないとうオ
ルナツツ・リバーにはたどり着けない。でも…だからあえて僕たち
はそこを通って行くのさ」とエリックがミーナに話した。

「その話が本当かどうか、それも今回の計画ミッシェルのうちなんだ」

「そうさ、そもそもそれらの話は前から俺は怪しいって思っていた
んだ。もしかしたら親たちが、子供を勝手にさせないための作り話
なんじゃないかって。だから、それを俺は今回確かめたいんだ。こ
こにいるみんなだな」

「そうだよ、我ら、『青き鷹』の仲間です七不思議の謎もあかしてや
ろうじゃないか！」

ビリーは右手のこぶしを天に向かって勢いよくあげた。

「そうだ、いざビリー、俺たちは恐れなんかしらない『青き鷹』
だ。今こそ、真の勇気を見せるときだ」とゲイルもあとにつづいた。

「そう…わかったわ。みんな全然気は変わりそうにないみたいね。
で、お兄ちゃんもみんなとそこに行きたいのね？」

「ミーナ…。僕は…本当は破りたくはないけれど、基地にも行って
みたいんだ。みんなと…」

「そう、わかったわ…。ならせつかくなんだから、あたしの分まで
楽しんできてね、お兄ちゃん。それにみんなもね。執事のエイブラ
ハムにはわたしからビリーのおじさんの小屋にみんなで泊まりにい
ったって、ちゃんとやっておくわ」

「さっすが、ミーナ話がわかるじゃないか」

「おいしいなあ…女じゃなければ、我々『青き鷹』に入りたいとこだ
ぜ」とゲイルが調子気に言った。

「でも、みんな約束してね。誰も怪我しないで無事に戻ってくるつ
て。そして、エリック、うちのお兄ちゃんを頼んだわよ。男にして
やっつて」

「ハッハハハ…」

これには全員が爆笑した。まったくミーナの奴ったら、ほんとかなわ

なかったな。親が不在だと何につけてもしっかりするっていうけれど、ミーナは典型的なしつかりものだった。だから、俺たちの中でもミーナは別格の存在だった。誰でもミーナの意見を無視できなかった。けれど、今回だけは計画通り実行したかった。それは、子供から大人になるために避けて通れない、いや少年なら一度は体験する冒険だったのかもしれない。怖さを知らない、無限の可能性を信じていた、あれは少年たちの夢の旅立ちだったのだと…、大人になってそのことを振り返るたび、そんな気がしている。あの時の冒険は俺たちにとっての『STAND BY ME』だった。そして俺はまだその旅を終えていないのかもしれない…。

そして、エリック率いる『青き鷹』の仲間たちは、その一本杉というボーダーを越えて、ウォルナツ・リバーへ向けて歩き出したけれど、本当は俺は行くべきではなかった。あの時、なぜミーナを一人残して俺はみんなと行ってしまったんだ…ってその旅から戻ってから俺はそう後悔した。あの旅は俺の中で決して忘れてはいけない思い出となって心の奥の引き出しに鍵をかけてしまわれていたはずだった。ミーナ、ごめんよ。本当に、ゴメン…。

「大丈夫？ ヒロシ」

ヒロシは夢から覚めた。

「あなた、だいぶうなされていたわよ。大丈夫？」シルビアがまるで母親のように自分の額でヒロシの額に触れた。

「もうじき夜明けよ。そろそろ、出発の準備にかかりましょう」

「ああ、そうだな」

S・20 夜のペント・ハウス その1

「リフター」…現在の地球の文明レベルではなぜこれが、重力に逆らって宙に浮くのか、解明がされていない。しかし、アルミニウムを張りめぐらした物体に高電圧を流すと、フワッと宙に浮く。しかし、今の地球の技術では、あまりにも高い電圧がそれにかかるのでそこに生き物を乗せることができない。しかし、その点さえ解決できれば、未来には有望な移動手段になるだろう。

今クルミとリヨウは断崖絶壁の崖の下からその約70フィート真上にある邸宅まで広さ2フィート四方の正方形をした黒い板状のものに乗り、音が全くしないまま、垂直に上がっていった。

「これすごいね、みるみる上がっていくよ。おいらもこれ1つ欲しいな」

「高いわよ」

「そうなの？ いくらぐらい？」

「そうね、アメリカドルにすると、かるく1ミリオンは超えるわね」

「い、1億ドル!？」

「でも、残念ながら非売品よ。それに絶対にこれを地球上で売ったりなんかしちゃいけないきまりなの」

「そうなんだ…でもなぜクルミちゃんそんなもの持ってるの？」

「……」

「これもまた秘密なんだね」

「ごめんね…。いつか、リヨウちゃんには全てを話すわ。私が何者で、どこからきたのかを。でも今はまだ話すことはできないの」

「わかったよ。クルミちゃんが話すまでおいら待ってる」

「ありがと。そろそろ着くわよ」

「え！？ もう着いちゃうのか…」

「思ったとおりね。監視用のレーザーが張られていないわ。このベランダに降りましょう。気をつけて降りるのよ、リヨウちゃん」

「そいつはやめといたほうがいいぜ、お二人さん」突然そのベランダの隣の木の枝から男の声がした。

「誰？」

「俺かい？ そうだな、ゴードンって呼ばれてるよ。はじめまして。ひよっとして門限守れなかったのかい？ それとも家を出るときに鍵を部屋の中に忘れたのかい？」

「アナタね…、笑えないわよ、そんな冗談」

「わるいね、俺は冗談が昔から苦手なんだよ。どうも俺の口は冗談を言うよりも女とキスするほうがうまいようだ」

「そう、ぜんぜんそうは見えないけどね」クルミはリヨウをそのゴードンと名乗る男のいる木の枝に移らせようとした。するとゴードンが手を差し伸べた。

「そうかい？ なんなら試してみるかい？」

「謹んでお断りするわ。それよりも、アナタ一体何ものなの？」クルミはゴードンの手を借りないで、自ら木の枝に静かに飛び移った。「その質問は、そのままお返しするよ。ただの泥棒じゃなさそうだな、そんなハイテクな乗り物を扱うところを見ると…どこかのスパイかい？ アンタいい女だし…。まさかCIAじゃあるまい？」

「わたしがスパイですって！？ やめてよ。でもアナタはついてるわね」

「なぜだい？」

「それはわたしがスパイでないからよ」

「でもキミがスパイでない証拠はなにもないんだよ」

「いいえ、あるわよ」

「どこにだい？」

「アナタ自身が証拠よ」

「それはどういうことだい？」

「それはアナタが今もこうやって生きて話しているからよ。わかった？」

「えー!? 生きて…」

「そうよ。この意味わかるでしょ？」

「やれやれ、ほんと西海岸には強気な女がいっぱいいるな…」

「それはどうも。西海岸の女を代表してお礼をいうわ」

「どういたしまして」

「それよりも、このベランダになにがあるって言うの？」

「それはな…、床にゴキブリハウスのしかけがあるからさ」

「ゴキブリハウス!?」リヨウとクルミがはもってこたえた。

「ああ、暗くて見えないだろ。だからひっかかりやすいんだ」

「でもなんでアナタはわかったの？」

「俺の足をよく見る！」

「あれ!? 裸足だね」リヨウがつぶやいた。

「それはな…俺のお気に入りのイタリア製の革靴が犠牲になってくれたからだよ！」

「靴？」赤外線スコープつきのサングラスでもう一度よくみると確かにそこには1組の革靴が床にひっついていていた。

「アツハハハハ…。たしかに強力そうね、その床の接着剤は…」

「ちきしょう、あのケインの奴、絶対に証拠を掴んで捕まえて、俺の靴代も請求してやる！ 覚えてやがれってんだ」

S・21 サンタ・クルーズでの再会

ルート1をクルミは愛車のシルバーカラーのTRIUMPHで南に走っていた。クルミはこのバイクのアクセルを噴かしたときの音が気に入っていた。

「…しいねえ。」と後部シートに乗った男の子が何か言ってきた。

「何？」とクルミがたずねた。

「あのね、クルミちゃんとバイクと一緒に乗れるなんてうれしいな
って言ったんだよ。」

「わたしの名前に何か形容詞をつけたでしょ。それがなんて言った
かってきたのよ、リヨウ。」

「えっ…うん、なんにもいってないよ。」

「きょ…なんとかって聞こえたわよ。」

「あ、いや、き、き、きれいな、クルミちゃんって、そういつた
んだよ。」

「そう。」

「うん。そうだよ。」

「ふーん。」

それから、二人の会話は一時止まった。クルミはサンタクルーズで
のことをもう一度思い出していた。

サンタ・クルーズに到着したあと、クルミはミステリー・スポツ
トと書かれた看板の矢印のほうへ向かった。その途中の目立たない
林道にそれ、道路から見えないところで、エンジンをきった。

「ここね」

「来たわよ」とクルミは誰もいないその林道で声を出した。

「…なるほど、そっちがその気なら、いいわ」というと、クルミは
目をつぶって精神統一をした。すると彼女の後ろの茂みから何か
クルミの後頭部めがけて投げられた。それが当たる直前にクルミの
姿がその場から消えた。そして次の瞬間には、先ほど彼女がいたと
ころから左に2mのところのいた。しかもその茂みに面して片膝を
ついて、右の手には銃を構えていた。そして発砲した。消音銃のた
めほとんどまわりには響かなかった。

「出てこないと次は本当に当てますよ」と静かな声でクルミは言っ
た。

「わかったわ」とすると、茂みから一人の女性が出てきた。

「久しぶりね、クルミ」

「まあ、誰かと思ったたら、ミリアじゃないの。お元気？」
「ええ、元気よ。さすが、クルミネ。腕は落ちてないわね」
「もちろんですよ。で、あなたが直接ここに来たってことは、今度の依頼はけっこう大変そうみたいね…」

15話目につづく…

S・20 夜のペント・ハウス その1〜S・21 サンタ・クルーズでの再会

この後も話は続いていきますが、現在は創作中ですのでしばしお待ちください。

- KAKU

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7772s/>

はるかな旅へ -Dreamland-

2011年10月9日01時01分発行